

日本大学工学部
校友会報

創立20周年記念特集号

昭和53年12月20日

第34号



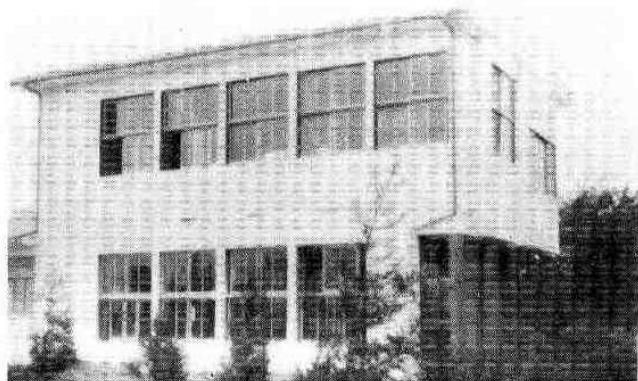
(旧1号館のあとに建った工学部30周年記念館)

目 次

口絵写真	3 頁～ 6 頁
あいさつ(総長、学部長、父兄会長、会長)	7 頁～ 8 頁
工学部校友会の展望	9 頁
「座談会」歴代会長を囲んで	10 頁～16 頁
学園の声	17 頁～23 頁
校友の所感	24 頁
校友会と共に歩んで	24 頁～25 頁
校友会年表	26 頁～27 頁
校友会歴代役職員表	27 頁
工学部卒業生累計表	28 頁
CAMPUS mini MEMO	29 頁
広 告	30 頁～37 頁
事務局だより	38 頁～39 頁
編集後記	39 頁



▲ 昭和33年工学部校友会発足



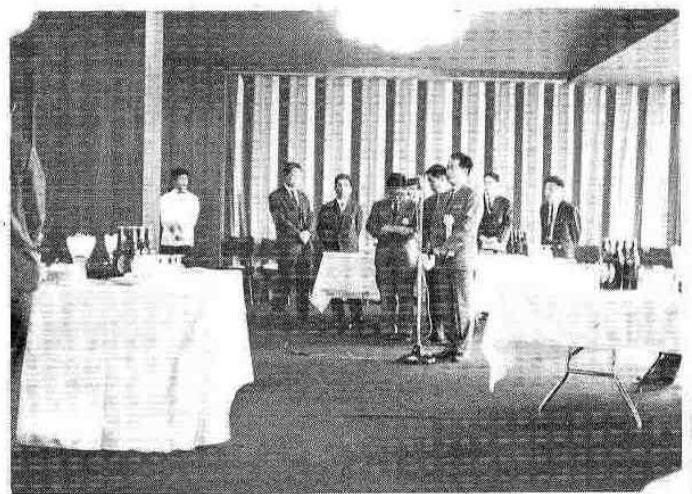
▲ 昭和34年校友会館落成



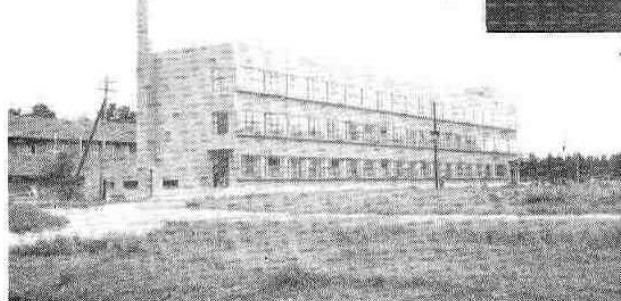
▲ 昭和35年校友会報創刊



▲ 昭和36年下宿斡旋開始

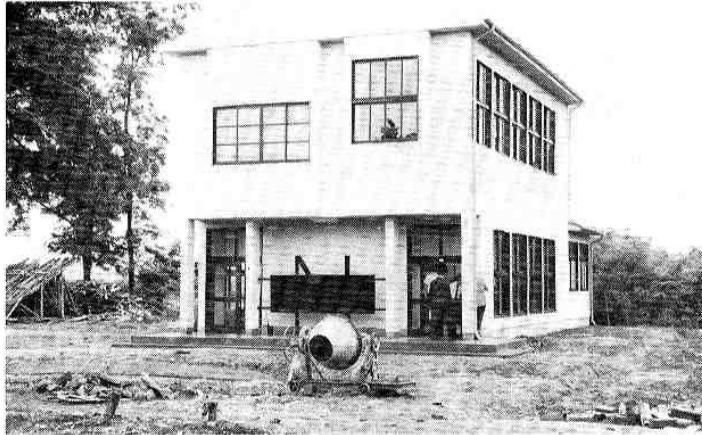


昭和38年校友会
東京地区懇親会開催

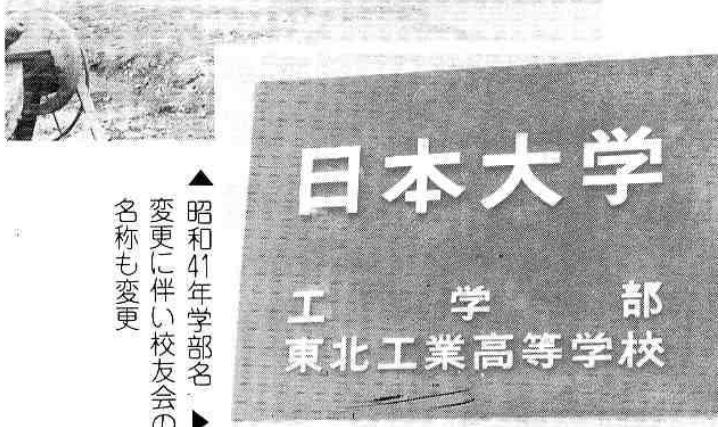
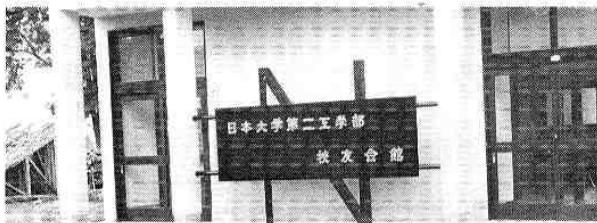


▲ 昭和37年学園の造成着々と進行

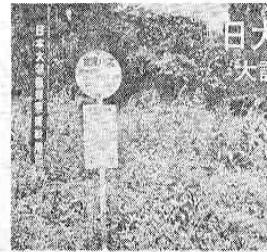




▲昭和39年校友会館移転



▲昭和43年野引教授工学部長に就任



「日大磐梯高原寮」が完成
大講堂・本館も同時着工

「日大磐梯高原寮」が完成(1964年)。左側は、西郷社務所。
右側は、三つの図書室から成る図書室。

右側は、1階一階層・本・一般部屋・エリカーラ・
机掛席・座席・ベッド

2階・貴賓・講堂・浴室

3階・管理室

施設面積計...多能(350)・12間(36)・6間(24)

主翼面積...取扱人材...35名(2)

その他の面積としては、高機能便器の手洗室などを含め、三部屋を完成すれば、専門研究室を含むと合わせて100名。この施設面積を活用する施設の構造は、建物の裏面には、まとめて設置されています。施設の中では、そのことをして設置する八戸、施設の事務局は建設される予定です。

これより以前は、中央の地区には大講堂(講堂の跡)があり、それを改修することになりました。8月4日に地盤調査が完了された。

「大講堂」(地盤調査)
「講堂」(跡)

主翼...主翼歩廊...大教室・講義室など

施設面積計...多能(350)・12間(36)・6間(24)

主翼面積...取扱人材...35名(2)

その他の面積としては、高機能便器の手洗室などを含め、三部屋を完成すれば、専門研究室を含むと合わせて100名。この施設面積を活用する施設の構造は、建物の裏面には、まとめて設置されています。施設の中では、そのことをして設置する八戸、施設の事務局は建設される予定です。

▲昭和40年学部管理棟工事着工



▲昭和42年広川教授工学部長に就任

校友会報

第14号(特集号)

昭和43年12月1日

日本大学工学部校友会

会員登録料 100円(月会費)

会員登録料 9.79~6.6

会員登録料 6.6~5.5

会員登録料 5.5~4.4

会員登録料 4.4~3.3

会員登録料 3.3~2.2

会員登録料 2.2~1.1

会員登録料 1.1~0.0

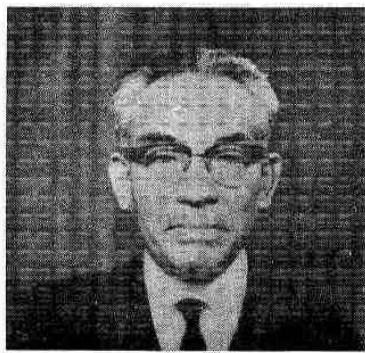
母校の紛争について

日本大学工学部校友会
会員登録料 100円(月会費)

あります。校友会は金氏半・王氏妻に対して何らかの形で要請されており、それを聞いてお聞きをしなくてはなりません。これが理事会が主張している回答方式と全く別の主張している方が多いのですが問題になってしまっています。開拓部は代表制の運営をしていました。金氏半は大阪府立上つみ空手道部を主導して世界大会を連れてきている団体であります。会員としてしましては当然金氏半の者である大阪府立は長崎であります。一般学生の卒業・進学がりであります。現在は金氏半が、日本大学工学部に就職しておられます。日本大学工学部は毎日一回開催してあります。このように、日本大学工学部は毎日一回開催してあります。



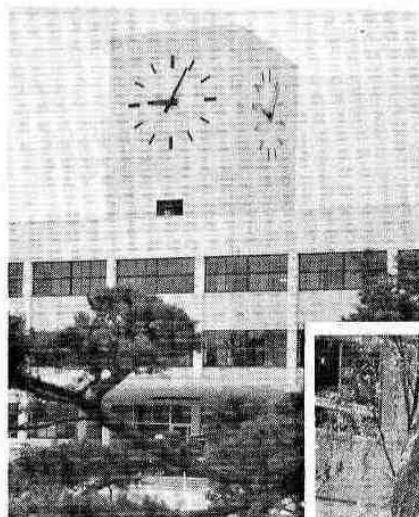
▲昭和43年学園紛争の解決に尽力



▲昭和44年永田前総長逝去

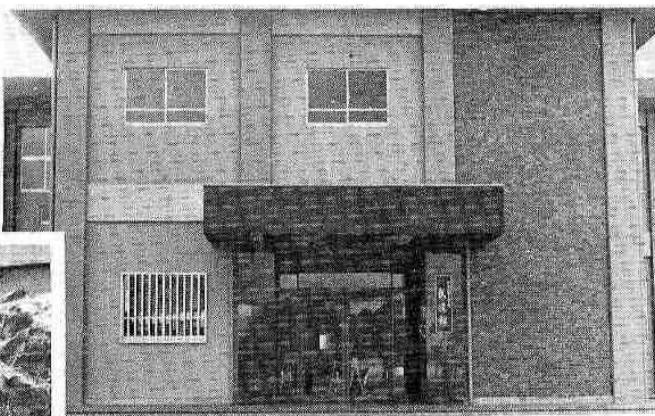


▲昭和45年北心寮跡に記念碑建立



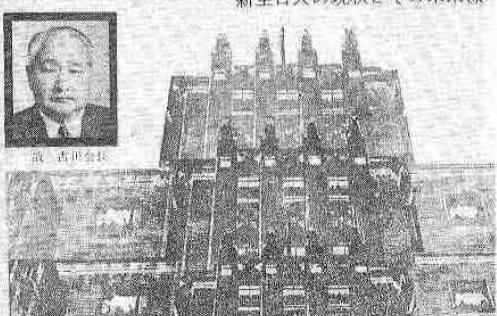
▲昭和45年東洋一の大時計管理棟に完成

▶落成
昭和46年武道館

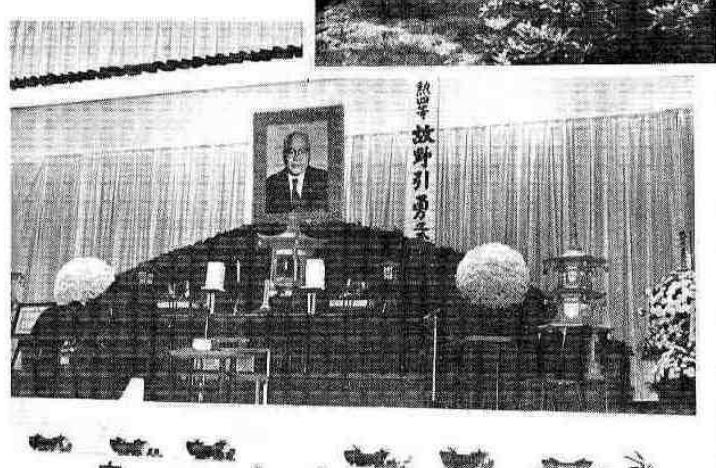


吉田会長を偲んで

新生日大の現状とその未来像



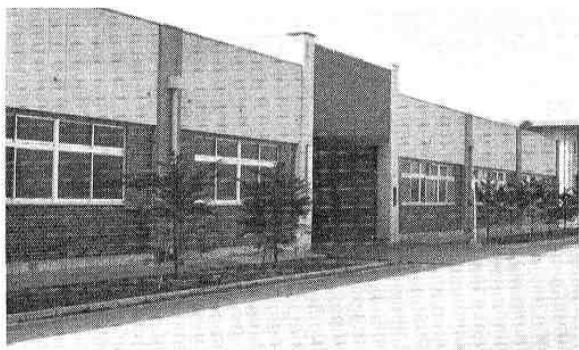
◀昭和45年吉田会長逝去



▲昭和48年野引工学部長逝去



▲昭和48年外木教授工学部長に就任



▲ 昭和48年校友会52号館へ移転



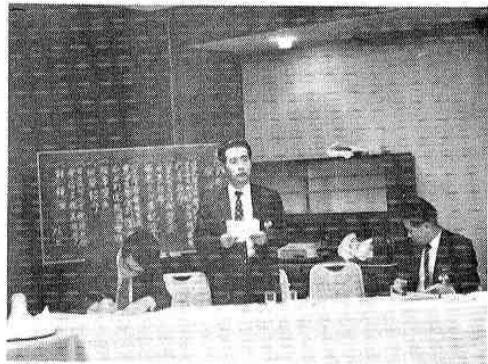
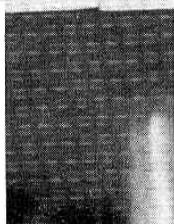
▲ 昭和49年校友会館を火災実験に提供



◀ 昭和49年鈴木總長叙勲
祝賀会開催



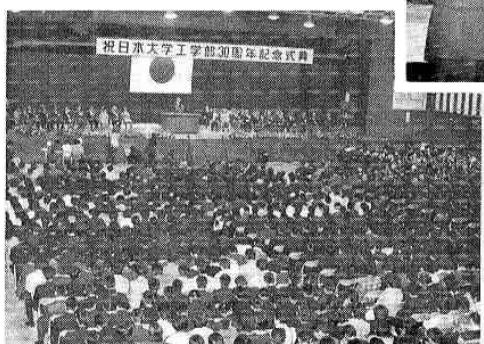
◀ 昭和50年
総合名簿発行



◀ ▲ 昭和51年東海支部総会



▲ 昭和52年古田重二郎先生
銅像建立



◀ ▲ 昭和53年白石校友会
事務局員退職

◀ ▲ 昭和52年工学部創立
30周年記念式典

工学部校友会20周年

をむかえて

日本大学 総長 鈴木 勝
日本大学校友会会長



工学部校友会が、このたび発足20周年をむかえ、校友会報特集号を発行される由、誠にご同慶にたえません。まず心からお祝いを申し上げます。

私学における母校と校友との関係は、国公立などと比べると、比較にならぬほど緊密な連繋が必要です。つまり、母校の発展向上には、校友の皆さまのご協力が力となり、一方、母校の名声の高揚が校友の方々に好影響をおよぼし、ご活躍のようすがとなっているからです。いわばこの二人三脚で私学を支え発展させてきたともいえます。

工学部は昨年10月下旬、創立30周年をむかえ、記念式典が盛大に執り行われ、その記念事業の一貫として古田重二良先生の銅像建立、記念館等が完成いたしました。これも校友のご支援、ご協力のたまものと深く感謝申し上げます。

ご存じのように、日本大学は明治22年、当時の欧化万能の風潮を憂えた時の司法大臣山田顕義先生によって、日本精神に基づく、日本法律の振起のために、日本法律学校として創立されました。爾来、89年、歴代の先哲によって建学の精神は脈々として受け継がれ、今日、わが国私学を代表する総合大学へと発展してきました。

時代はかわっても、有為な青年を受け入れ、そして育成し、さらに社会へ多くの人材をおくり出していく使命にはかわりはありません。

今や本学の校友は、実に45万8千余に達し、政・財・実業界はもとより、各界各層での校友のご活躍にはめざましいものがあります。

私たち大学の教職員は、さらに先人先覺の精神を体し、一同が協調団結し、それを新たなエネルギーとして大学に寄せられているご期待に応えていく所存です。

今後とも、工学部校友会の一層のご発展をねがい、武田会長はじめ、役員および会員の方々のご健勝を祈念し、あわせて、学部の精進と興隆を望んで、ご挨拶といたします。

あいさつ



日本大学工学部長 外木有光

昭和31年3月に設立された「日本大学第二工学部土木工学科校友会」が核となって、33年5月にいたり（学術研究の推進並びに会員相互の向上親睦を図り、以って母校の発展に寄与する）という目的で、「日本大学第二工学部校友会」が

結成されました。日本大学工学部校友会は、このときから数えて今年満20周年を迎えたことになりますが、年ごとに発展充実し、いま立派な校友会に成長した姿を見て会員諸君とともに心から慶び、これまで会の運営に苦労を重ねてこられた諸兄のお骨折に対し深甚なる敬意を表します。

校友会が今まで辿った跡を顧みるとき、去来する思い出はつぎつぎと鮮やかに蘇って、そのどれもがつい昨日のことのように懐かしく感じられます。はじめ木造二階建の校友会館に置かれた事務局は、建物の移設といっしょに移り、さらに部室棟が竣工してからはその一画に引越し、この9月より工学部30周年記念館で執務することになりました。二遷三遷したその経過のうちにおいて校友会が母校に尽した成果は、じつに目覚ましいものがあります。

校友会は学校と緊密な連絡のもとに、以前は学生会員に対する奨学金の給付事業をおこない、また日大紛争が勃発した際には学校の方針を体して父兄会と手を携え、この解決のために献身努力を傾けました。学園が平静に復するとただちに、父兄会と一体となって学生の勉学・研究に資するため図書を寄贈し、人間教育に効果あるクラブ活動の助成などをはじめました。さらに学生生活の基本である下宿についてはつねに意を配り、下宿対策委員会活動の一端を担って下宿の実情を調査しその結果を参考として学生の希望に応え、適正な下宿の斡旋をおこなうなど、先輩として後輩の健全な育成に努めまいりました。これは他の校友会には見られない優れた特色と言え得ましょう。

今年20周年を迎える記念行事として、工学部校友会は、一昨年秋工学部の開祖とも言うべき古田重二良先生の銅像建立について父兄・日本大学校友会福島県支部の校友・教職員に諮りました。この事業は満場一致の賛同を得全者力をあわせて計画を強力に推進した結果、昨年秋には予期以上の成果を収めてこれを完成しました。時あたかも工学部の30周年に当りました。そしてこの銅像は、ひとり工学部のみならず全日本大学の記念像として建立されたものとも解され永遠にその偉容を誇り得ます。

この記念すべき年にあたり、工学部校友会がますます充実、発展することを祈念してあいさつとします。

（日本大学教授、工学部校友会顧問）

校友会発足20周年を祝して

日本大学工学部父兄会
会長 篠 一吉



日本大学工学部校友会創立20周年を迎えるにあたり、工学部父兄会を代表して、校友会の皆々様に親しく御挨拶申し上げる機会を得ましたことを感謝いたします。校友会の皆様が果たされた数々の御功績を称え、その御活躍に心から

敬意を表するものであります。「光陰矢の如し」と申しますが、私も校友の一員としてS 23年～S 26年に在学し、当時の専門部工科に学んだ者です。自然環境に恵まれた広大なキャンパスの中に当時は旧海軍航空隊の跡地に、木造兵舎を改造した老朽校舎ではあったがすき間風の吹く教室、木製の火鉢を囲んでの講義も、若さと情熱に燃えて御指導下さった諸先生方、級友等懐しい事ばかり思い出されます。時は流れあれから27年の歳月が過ぎ去り当時の大学のイメージとは異なり在校生も5400名を数える東北屈指の近代的マンモス大学の工学部に成長しました。これは、我が大の教育方針に基づき、思想堅実にして心身共に健全な人材を育成することをモットーとし、知育、德育、体育の調和を期して自由環境のうちに御指導下さる外木学部長先生を始め、教職員の方々の御指導の賜であります。毎年有能なバイタリティーと協調性のある卒業生を送り出す事の出来ることは、私達父兄会にとっても無上の慶びです。校友会におかれましても初代会長の渡辺幸夫氏から始まり、現会長の武田仁幸氏に致るまで、過去20年その長きにわたり、幾多の困難を克服し着実に学園の整備に努め、平和と安全を維持しより良い学園の環境づくりに努力して戴き、専門書の購入や課外活動、その他の助成金の援助と、父兄会と綿密な連絡のもとに活動されております。又遠隔地の父兄にとっては最大の関心は下宿対策問題であります、校友会におかれましては学内の校友会事務所を通して、親身に及ばぬ御指導により良い下宿を斡旋して戴き、父兄は云うに及ばず父兄会としても心から感謝申し上げます。また卒業する学生父兄にとりましては就職が問題であります。校友の皆々様も一流企業に就業し益々御発展御活躍の事と存じますが、後輩の就職に関しては多大の御指導、御協力を願うものです。恵まれた自然環境の中に家族大学をモットーとし御指導下さる教職員の皆様方に感謝申し上げ校友会の益々の御発展とより良き父兄会を目指して、共に歩み続ける事を念願し今後とも一層御協力を願い申し上げ、校友会会員各位の御健康と御多幸をお祈り申し上げお祝いのことばと致します。

(専門部工科、建築科第2回卒業・公務員)

ごあいさつ

日本大学工学部校友会
会長 武田仁幸



日本大学工学部校友会が昭和33年に創られて以来本年度で早や20年の才月が流れ去りました。多くの試練を経てわが校友会が今日のあるのを皆様と共に心からお喜び申し上げます。10年一昔の謬を待つまでもなく嘗ての紅顔の青年は

二昔の年を重ね既に白髪の見られる頃となりましたがわが校友会が卒業以来校友の心のよりどころであった事を思うとき改めてここに本会創立20周年を機に特別会報を編纂し皆様の青春の想い出を掘り起すのもまた意義あることと思います。ただ本年度の総会にて本事業の承認をいただき編集事務を進めて参りましたが、何分担当委員も職場を持っている等仲々予定通りの日程がつかず発刊が大巾に遅れましたこと御容赦下さいますようお願い致します。

さて、本校友会は学舎が郡山にあるため地理的な不利を何とかして補おうとした結果友人相互間は申すに及ばず師弟の間にも他に例を見ない程の連帯感を生み特異な校友会として育って参りました。本会の基本事業が常に学部の発展を指向しているのは創生期のこのような要因が大きく働いているためでもありますが、今後は更に会員相互の連絡や厚生関係にも力を入れねばならない時期になったと考えております。また時局柄準校友（学生会員）の就職問題等に関してはできる限りの援助をしたいと考えておりますが、生活を左右する問題ですので仲々容易ではありません。そこで本会では会員による求人件数の増大と職域の拡大並びに就職者への正確な資料の収集等を目的として会員名簿の電算機処理を明年度の事業の一つとしてとり上げる予定ですが私はこの機能の効果に大きな期待を寄せております。本事業は予算の関係で昭和54年度から3年計画となります、会員の皆様にはよろしくご協力下さるようお願い申し上げます。なおこの件については工学部父兄会からも多大の援助をうける約束になっております。申すまでもなくこれからは単騎決戦の時代ではありません。工学部の発展には校友会も父兄会も地域社会も一つの連った綜合力として教育にうちこみ優秀な人材を育成し世に送り出さねばならないと思います。20才になった本会はこの際学園の中から更に社会に歩を運び母校に必要な養分を分け与えてもらえるよう努力しなければならないと考えております。

当会報の編集にあたり年々増加する会員の正確な記録保存や本会のあり方等を申し上げ本年度が単なる創立20周年ではなく次の時代への飛躍台となる年であることをここに改めて申し上げ今後の御協力御支援を心からお願いいたすものであります。各位におかれましては充分ご健康に留意されご発展あられんことを祈念してあいさつといたします。

工学部校友会の展望

昭和28年3月22日本造5号校舎の体育館に於て第1回の卒業生 104名が集まり、5年後の昭和33年5月郡山市商工会議所に於て、日本大学工学部校友会（当時は日本大学第二工学部校友会）が、会員相互の学術的資質の向上と、親睦を深めて、母校の発展に寄与することを目的として創立され、土木工学科第1回の卒業生 渡辺幸夫氏が、第1代目の会長として就任した。

想えば当時は世情も混乱の渦中にあって学生生活も苦難に満ちたものであったが、師の学生を想う心、学生の師を慕う心、更に学友同志のお互いを慈しむ心が渾然一体となって、自らの会として発芽したのである。以来、校友会は着々と基礎を築き20年の才月を積み今日の姿となった。

この記念すべき年にあたり会務をあずかるものが、本会の将来のあるべき姿について申述し、会員各位のご批判、ご叱声を受けるのは、意義深く、校友会の発展をうながす力として必要欠くべからざるものであろう。

さて、工学部校友会は、日本大学工学部の卒業生と在学生をもって組織された団体であり、大学と云う教育の場にかかわる非常に公的な性格の濃い、決して私的なものたり得ないことを明言しておかねばならない。品位はあくまでも高く、思想は稳健中正を旨とし、社会的な信頼と支持を受けなければならない。

工学部校友会は、日本大学に校友評議員を1名おくり、日本大学各学部の校友会を統帥する日本大学校友会にとって、欠くことのできない構成メンバーであります。

もちろん、母校工学部に対しては、常に謙虚に自らの立場を認識し、決して学部に先んずることなく、しかも遅れることなく、できる限りの協力援助をしてきたが、今後もこの立場を絶対に守らねばならない。

工学部父兄会は、本会より10年若く、本年度で10周年を迎えたが、校友会とその目的とするところは同一であるから、共々に相擁して、足りなきは補いあって、充分なる力を發揮するようにしたい。

このたび、増加する校友会会員を効率良く整理し、要求される事項に合った名簿や情報の提供を目的に父兄会とタイアップして、会員名簿のコンピューター化について提案したい。

これは、現在社会情勢の動向にともなう工学部卒業予定者の就職開拓の一助ともなるもので、本会の使命として、澎湃として起つたこの要望に応えざるを得ないためである。これには相当の出費を課せられるが、事業内容を三部に分け、一部一年として3年計画ですすれば、多少割高になってしまって資金負担に耐えられるので、昭和54年度より早急に実施したいものである。会員各位の深いご理解と、コンピューター入力カードの記入、提出にはご協力をいただきたい。正確な内容

でなければなりませんので、予定どおり事業として認められた場合には、送付された書類には指示どおりに記入されるようお願いする。

現在は、正会員（卒業生）に対する事業の方が、準会員（在学生）に対するものよりも少し劣るので、この点の充実に配慮せねばならない。すなわち、正会員の年令的なこともあり停年に伴う再就職などに対する情報の提供や、更生福祉についての事業を検討すべきであろう。

また、会員数の増加にともなう運営資金の増大は、将来資金枯渇の恐れなしとはしない。

本会の命脈を守るためにには、賢実で、社会的品位のある事業を営み、明朗な運営によって、公正な利益を得て、これを本会の運営資金に繰り入れるように、規約等の検討をせねばならないし、その規模などについて詳細に調査する要があろう。

本会の会員は、昭和53年度現在、16,800余名の多さに達し、しかも全国津々浦々に散在している。役員の選出は規約にのっとり公平明朗になされているが、会員数に比べて役員の絶対数が少ないとよく指摘されることである。今後役員の種類に、各学科各学年次生の中から通信評議員を選び、通信による役員として新たに加え、重要な議案等の審議を通信によって行ない、総会に次ぐ意志決定機関として会務を運営してはどうだろうか。

現在、校友会には北海道、東京、東海の三つの支部と函館、千葉の二つの支会を擁し、組織の拡充に力を入れているが、将来の計画として、7ブロック10カ所に支部を設置する予定である。

具体的には、北海道、東北、東京、関東、東海、北陸近畿、中国、四国、九州（沖縄を含む）の各地区であり、ここで網羅できない部分は支会の形で充足させるようにしたい。

特に東北地区の支部は本部内におき、東北各県を掌握する、しかし、支部設置については、あくまでも現地校友の熱意にまたなければなりませんので、決して強制するものではなく、また、支部設置に伴う経済的な負担に耐えられない場合は設置年度を遅らせるなどの工夫をして、その目的を完遂するよう配慮する。

以上、本会の今後のあり方について述べたが、会員各位には、この外に多々良案があるものと推察いたします。校友会益々の発展のため、是非とも、提案なりご教示いただきたいものであります。

[注] 校友会の会議は、定期総会年1回、会員全部、最高の意志決定機関、役員会年4回、理事と18名の評議員、総会に次ぐ意志決定機関、理事会定例月1回、会長1名、副会長2名、事務局長1名、事業担当理事1名、経理担当理事1名、この他の理事9名で構成する役員会に次ぐ意志決定機関、ただしこれは会務の執行機関である。

座談会

歴代会長を囲んで

とき 昭和53年10月14日

ところ 日本大学郡山研修会館

(出席者) 歴代会長(初代・3代) 渡辺幸夫
ク (2代) 関根昭一
ク (4代) 根本年雄
ク (5代・現) 武田仁幸
ク (6代) 太田雄八郎
ク (7代) 松山光克
ききて(副会長) 半沢忠
ク (経理部長) 武藤貞泰
ク (事業部長) 西村孝
司会(事務局長) 佐藤光正

武田 本日はありがとうございます。

年に一度会長会をやっておりますが、校友会創立20周年記念の座談会を、これから開催したいと思います。今日は、皆さんお忙しいところ遠いところからおいでいただき、ありがとうございました。座談会でございますので、ざっくばらんに会長時代の思い出話などをお話し合い頼みたいと思います。ここに初代会長の渡辺さん、関根さん、根本さんそれから太田さん、松山さん、また私も現会長として、皆さんのお話しをお聞きしながら私が根本さんの跡を継ぎました時代のお話しもさせていただきたいと思っております。事務局長の佐藤さんに司会の役を務めていただきますので、よろしく御協力おねがい致します。

司会 ありがとうございました。

それでは誠に僭越ですが、私が今日の司会をさせていただきまして会を進めて参りたいと思います。なんと申しても本会発足当時について、初代会長の渡辺さんのお言葉を頂きたいわけなんですが、当時の発足の動機になったといいますか、発端といいますか、そのようなことをひとつ、かいつまんで話して頂きたいと思います。



渡辺 私は、昭和28年に土木工学科第1回を卒業して、福島県庁の土木部に入ったわけなんですけど、その時主任技師という制度がありました。その時の主任技師が現在の郡山市長の高橋堯さんであります。この外に、日大の先輩がその課に数多く居て、各部門で非常に活躍しております。自分も日大を卒業したことについてよか

渡辺氏 ったなというような感じをもったわけです。まず動機からお話ししましょう。たまたま県に入って二年後ですが、校友の消息を知りたくて学校に電話したところが、学校では卒業時については、消息はわかるけれども、その後の動向についてはわからないというような連絡がありまして、これから歳と

ともに消息がわからなくなるのではないか、というような心配があったわけです。そういうことで、消息をよく把握しておくような何かが欲しいな、というようなことが一つと、更に、たまたま学校に行った場合など、ちょうど先生が授業中だったりしますと、休む場所もない、どうしても学校から足が遠のくというようなことになってしまいます。母校を訪ねた校友のたまり場的なところが欲しいな、というようなことを感じたわけです。また、卒業して社会に出ますと、各学校の校友会の集りが各学校ごとによくやっております。日大も例外ではないのですが、規模が大きく、オール日大となりますと、年に一回ぐらいやっておりましたけれども、やはり独立した校舎が郡山にあるので、独立した校友会、そういうものをつくりたいと思ったことなどですね、しかし卒業して2年くらいですから、五科全部は無理だろうから土木工学科だけでもやろうじゃないか、ということで、太田君、県庁の松田君とか、数人の人達と相謀ったところが、やはり親睦団体として、作ってみようというようなことで、私が、自分で葉書を買い、自分ががり版印刷をして約150から160枚発送したように、記憶しておりますけれども、そういう形で土木工学科の校友会が先ず発足いたしました。その後、更に2年ぐらい過ぎまして、やはり県の土木関係の職域の中に建築の卒業生もいるし電気の卒業生もいる、なんか土木ばかりでやっているのはおかしいんじゃないかな、一緒にものを作って共に親睦を深めたいものだというような話がでまして、みたところ各科でも郡山近辺にいる方がだいぶおりましたので、それでは母校に先生として残っている人も含めて、話してみようというようなことで、建築については県に諫佐君がおりましたので、諫佐君に話をもちかけ、電気は鳥羽君と杉君だったと思います。機械については、福島から通っている菅野君、あと化学については、佐藤圭一君とか後藤君だと記憶しているんですが、まあ、そこら辺に連絡して、『こういうことでどうだ。』『やあ、いいネ』となり、下準備1回で正式に発足したわけです。それで発足当時問題となった点は、駿河台の工学部の桜工会と我々の会との関係でありました。むこうの考えでは、福島県支部というようなことでした。しかし我々は独立した校舎があるんだし、独立した校友会なんだから徴収した会費は、こちらで運用したいと考えたわけです。当時はまだ、こちらの校友会はできたばかりで力も弱く、運営の仕方から検討して行かねばならないのだから、桜工会は本家みたいなものだから、我々の会が伸びられるようめんどうみてもらいたいということで、関根君も一緒に行つたことがあると思うんだけど、何回か本部と話し合いをし、とにかく本家なんだから、分家が一本立ちできるまでは後援していただきたいということで、会費の一部を本部に納入することもなし運営して来たわけです。ここで特に述べなければならない本会の幸運は、発足当時から、学部当局の理解と協力がものすごく有ったことです。従って他学部にはないような斬新な校友会活動が、はじめからできたと思います。このような基礎の上にたっていたからこそ校友会が今日の姿に発展して来ているのではないかと思うわけで、学部当

局の親身の理解と、その後歴代の役員の皆さんの応援に対し、心から敬意を表したいと思っています。

司会 その後、校友会館設置の時代をむかえたわけですけれども、学内に校友会を置くことについてのいきさつなどを……

渡辺 当時、学校の敷地内に校友会館を置くということについては許可するが、しかし建物が校友会のものとなると、火の問題とか、盗難の問題など学校で責任を負えなくなるので、そういうような施設については、造るのは校友会でなされて結構だが、しかしその施設は、大学の所有にしてもらいたいということで、造ってから寄付採納の形で学校の方に寄付しまして、それを校友会で借りて使用するという形で、現在でもそういうようなことで所有権は学校、会館の管理と使用は校友会ということになっていると思います。

関根 会館の場所は、学部の敷地内に最初決ったんですけども、市内という話も少数意見出ていました。

太田 現在のこの研修会館のあるところも、候補地だったわけです。

関根 そうでしたね、学校では市内にということで、他のところやこの場所を考えていたのだけれども、その当時、寄贈者の橋本万右エ門さんとの間の寄贈問題がはっきりしていなかったんですね、それで結局学校の中ということになったのです。

司会 学園整備に際して、あの想い出の校友会館は、大規模な火災実験に供されて、たくさんの貴重なデータを残してなくなりました。あの会館の建築資金の調達などについてはどうでしょうか。

渡辺 当時、校友会の結成はできたがその会費をどういうふうにするか、という問題で最初は卒業生全部に校友会が発足したこと、については終身会費を納めて頂きたいということで、たぶん当時の金で2000円だったと思いますけれど……呼びかけたわけです。発足しばかりにもかかわらず、会費は割合と順調に集ったわけです。校友会の会員数も少なかつたし、それと学校に残られた校友の先生方に全面的な協力を頼んで、あのように校友会の建設が話題に出た初めから、実行に移されたものと思っています。苦しかったけれどなつかしい想い出です。

太田 当時、校友会館を建てようとしても、とにかく金のないところで始ったわけですよ。それで渡辺会長とか役員の方々が、苦労して企画しましたね。

関根氏
渡辺 秋田銀行にお世話をになりました。

太田 180万ほどの金額で、和光建設が落札して、二階建てのものを、現在のプールの附近に建築したわけです。あの場所は地理的に校内の奥で、正門から遠いところでした。

司会 これは関根さんの会長当時に落成だったんですね。

関根 そうです、この会館建設について実質的に動いたのは、土木の和田弘三君、それから化学の佐藤主

一君の二人が、だいたい細かいところをやったわけなんですが、先ほど話に出た秋田銀行からの180万も何とか借りたわけです。しかし、いくら計上しても180万はね一度に集まらなかったから、長期借入れということにしたんですね。資金面では、学生会員から入会金をとらないとどうにもならないということで、当時の江崎次長にもお願いして、協力頂いたわけなんですね。それで学生の新入生からも入会金なども入るようになったわけですね。そんなことで、校友会報の昭和35年の創刊号に見えるように、事業内容のところにだいぶ学生を対象にしたものがあります。この入会金は校友会の資金の大きなパーセントを占めていました。アカシア育英会とか下宿の斡旋などの大きな事業や、学生諸君が通学バスを利用するとき雨など降った場合には、屋根のある停留所がなかったので校友会でそれをつくって、やはり校友会館と同じような手続で学校に寄付したりもいたしました。こんなわけで、35年当時は学生に対する還元をたいへん重視していましたね。

司会 現在でも、この主な事業がかたちこそ變っていますが、やはり基本的にはこういうことをやっていますからね。

関根 その中の下宿の斡旋は皆さん御承知のように学生課でやってたんですが、それをひとつ校友会でやったならば、学生に対しての事業としてはいいだろうということで、学生課の方から校友会と共同でやるのですけれども窓口は校友会にということで、現在のような状態となったわけなんですね。

武田 初代会長が渡辺さん、昭和34年に関根さんが2代目、それから38年まで関根さんは5年間、会長をおやりになったわけなんですね。この期間中、校友会館の竣工、会報の創刊、会員名簿の整理、学生会員への還元事業など、量、質ともに大変な事業ではなかったかと思うんですが……、創刊号に入事面をみると、会長に関根さん、それから副会長に鳥羽さん、渡辺さん、更に役員には諫佐さん、太田さん、木村圭二さん、唯今監査をなされている高野操さん、半沢さん、それから今ここで司会をしている佐藤光正さんの名前などが見えていますが……

司会 これは私が、学生委員長だった時ですね。

武田 あ、学生からなんですか、学生からも出ていたんですか。

関根 評議員として出ていたんですね。

司会 だから関根さんの中されたバス停留所の新設のこと、私実は知っているんです。

西村 そうしますと、この時代の役員はどのような形で選出されたんでしょうかね。

関根 総会で、各科から選考員をして、それで選考員がですね、だいたい適当な方を決めたわけなんです。最初のこういうふうな時ですので、学内からは鳥羽さんとか、あるいは高野さんですね、御2人には相当活躍をしてもらつたんですね。高野さんなんか学内事情を知って動いてくれたから、学校内のいろんな交渉もある程度ですね、下打合せをしていてから私が出ていくというようなことで、江崎次長先生は事情をよく理解していましたね。

武田 評議員として、菊池光子先生の名前も見えま

すね。伊藤亀雄さん、それから学生として竹内さん、三木さん、野島さん、八田さん達の名前もありますね。

太田 やはり、学生委員会関係だったと思います。

司会 そうです、当時学生委員長と副委員長と、それから総務とですね、5人でるようにということで…

閑根 これは学生からの入会金や、卒業時のいわゆる終身会費などということもあって、学生会員の理解を必要としたわけなんですよ。

司会 終身会費は、私達の頃は200円だったと思いましたが。

太田 いや、それは年会費ですね。

司会 年会費だったんですかね、たしか200円を納めたような記憶があるんですよ……

閑根 終身会費というものは、38年の時に登場してきたんですね。

太田 当初は、土木が主体となってやりましたから当時の会則なども記憶しているのですけど、これで相当あとまで運営していましたが、会費のことはいつも議論の対象だったですね。

閑根 この会報創刊号に載っているのが当時の会則ですから、会費の件も見ていただきたいと思うんです。

司会 現在の会則は、随分後からできているんです。それまで当時の会則でやってたんです。さて下宿の問題はどうでしたか。

閑根 下宿の斡旋では、下宿屋と校友会との間でずい分口論もしましたね。

司会 私はね、閑根先生がスクーターに乗って、校友会館へ出入りしてたのをよく見かけました。現在、事務局を預ってよくわかりますけど、下宿屋さんはもうけなくちゃならないし、こちらはできるだけ値切らなくちゃならないし、という立場ですからね。

根本 料理講習会やったの、いつごろでしたかね。

閑根 このころでしたね。

根本 そうでしたね、下宿のおかみさん達を呼んで

閑根 料理講習会やりましたね、とにかく徳定、金屋、御代田あたりは失礼ですけど、農家の家屋を改造して下宿屋にするんですけど、すぐ隣あたりに馬屋とかブタ小屋とか牛小屋があるのですね。そうすると夏になるとハエとか何かでね、うちの学生も都会育ちが相当多いですからね、衛生的にまずいとかね、また食事が悪いとかね、肉をつけないとか、魚がまずいとか、そういう問題があって、随分下宿屋さんと校友会とやりとりしましたね。

司会 次に年度の順序でいきますね、また渡辺さんに会長の大役をお願いし、お骨折り頂いているんですけども、この時校友会館の移転があったわけですね。また記録によりますと、校友の学生への講演懇談会というのが見えますが、これはどんなことでしたのでしょうか。

渡辺 これはですね、学生が卒業して社会に出た場合の心構えというものを学校では教えられない、社会に出てすぐに役に立つような勉強や心構えというもの

を、ある程度卒業した先輩から話を聞いておくことが必要じゃないかというようなことで、当時各科の卒業生の中からピックアップして2名くらいだと思いますけども呼んで来て、社会に出た場合にはどのような気持がないといけないのかというような話をさせて、社会への関心を持たせるために、この講演会、懇談会をやったわけです。だいぶ学生も、先生から聞く講義と別な角度の話で、非常に興味をもって途中からエスケープするとか、人数が少ないとかいうことじゃなくて、ほとんど全部の学生が聞いてくれて、非常に盛会だった。当時、私はやってよかったと思いました。

司会 さて、何と申しても校友会にとって一番大きな事件と申せば、学園紛争だったと思います。根本さんは、時代の分岐点に立って一番悩んだ会長ではなかったかと思うのですが、当時を振り返って話して下さい。

根本 そうですね、あの学園紛争に入る前に、3月の22日か24日ごろかな、国税局から係員が、20億円の脱税とかいろいろな問題があって、学部に来たわけです。その時は丁度、昼間の時間で白石事務職員から私の勤務先に電話がかかってきて国税局の方が来たという連絡なんですね。私としては、何故来たのか見当つかなかったんですよ。だから国税局の誰が来たのですか、とか名刺をもらったか、というような話をして一寸待ってもらっていたかのようにとの指示をしたんです。ところがどうしても外出できなくて、そのままになってしまったのです。再び連絡によると、また次の日の12時に来るということだったのです。しかし次の日には、もう来なかつたんですよ。私としても、校友会から学生への援助資金として出した金が原因で紛争になるなど考えませんでしたね。しかしこれと関係なく6月になってからですね、学生が動き出したのは。

閑根 昭和43年ですね。

根本 以前校友会では、学生の課外活動助成の意味で体育関係に額は少なかったけれど、援助をしていました。当時の体育部長はたしか、川崎という名前だったと思うんですが、私とこの援助金のことで話し合っている折に紛争が発生したんですね。こうなりますと、彼は体育部の役員をやっていましたから、紛争のメンバーになるわけですね。そこで私と半沢さん他理事4名ほどと説得をして、いわゆる紛争の活動をすることを止めるよう勧めました。その後8月になつたら手紙で、私は紛争に加わることは止めましたといつたんです。しかし、今考えてみると私だけの力ではなく、校友で大学に残っている先生あたりのバックアップがあったからだったと思っています。

司会 私も学生委員会をやった関係もあって、学部名変更問題のときのことなども知っていますが、学部のいわゆる責任のある人と学生委員会とは非常にコンビネーションが良くて、学生と先生が一丸となっていつもいろんな運動やっておりました。それがなんだかあの当時からだんだんおかしくなりだして、大塚君などは不幸にして学校を卒業しない最後の委員長になりましたね。大塚君への想い出はどうですか。

根本 そうですね。工学部学生の自治組織である学生委員会が学生の支持を失ない、工学部斗争委員会に



根本 氏

変貌したのですが彼等と2回会ったですね。1回目は失敗に終ったんですよ、9月末かなパリケードを築く前だったと思うんですがね。大塚君とあとは名前を忘れましたが、4人ぐらいかな。その方達と話をしてね。どうして学内封鎖を解けないのかという話をしたんだけども、その時は結局、寄付行為っていうのかな、学生方から学校に対して5項目とかの要求を出しましたね。それが解決しなければ、紛争は止めないという高姿勢だったんですね。だからその時は、話に進展はなくもの分れになつたんですけどね。2回目はパリケード内だったですが、やはりだめでした。日本大学にとって風雲急を告げている時に工学部校友会としては孤立していられないしね。生産工学部や理工はどんな情勢でわかるのか、それでずい分と電話などで連絡し合った結果、日大の三工系が1回集ろうという話になつてね、半沢君と私と、その外名前は記憶にないが全部で5人か6人ほどで行つたんですよ。それで理工学部の高木先生と理工の校友会長、生産工学部は校友会ができていなかつたけれども、何か世話役みたいな格好で、実際はあの生産工学部の場合は、工科校友会の中に入つていたのですが、校友会結成の気運がずい分あったような感じでした。そこで加藤先生あたりを引っぱって行ってですね。2・3回情勢分析をしたりしました。この横の連絡を受けながら、これに学校の情勢など聞きながら対処したんだけれども、まあ実際には、我々はどうにもならない問題だったんですよね。またま工学部父兄会の結成大会が、芳賀小学校を借りて行なわれたり、それから日本大学校友会福島県支部が総会を開いたということで、校友会と父兄会関係は学校を中心にして確固たる連けいができるわけです。そして、情勢を交換しあいながら情勢を見守つたわけですね。当時武田さんには大変お骨折りを願つたんですけど。

武田 そうですね、あの時は根本会長と私と、時々半沢さんも加つて、後楽園ホテルには何回も参りましたね。その後、紛争が解決してから校友会のあり方として、工学部校友会方式とか郡山方式とかいうような言葉も出たようですね。

司会 あの学園紛争は学部にとっても校友会にとっても、常に協力態勢を堅持していかねばならないという感を一層深くさせましたね。世の中も大学も大きな転換期をむかえた時の学部長として、広川先生と野引

先生がおりますが、広川先生は工学部で育たれた教授で、部長になられて一生懸命おやりになつたにもかかわらず、不幸な学園紛争という時代の流れに押されてしまって、敏腕を発揮できないで残念だったろうと思うんですね。その後野引先生が縫がれたんですけど、急逝なされました。心中を思うと胸が痛みますが、野引先生はどちらかというと野人のタイプですね、やってみてから結論を出そうという方だったですね。堂々たる粗野が魅力でした。校友でも何でも、とにかく力のあるものは皆利用してみよ



武田氏 やってみてから結論を出そうという方だったですね。堂々たる粗野が魅力でした。校友でも何でも、とにかく力のあるものは皆利用してみよ

うという実践型の人だったですね。だから私達の校友会の力を發揮させていただいたということになるんじやないかと思うんですね。しかし何と申しても古田会頭の逝去は、当時のことを想うと痛恨事ですね。現在の工学部のこの姿を、お目にかけられないのは非常に残念だと思うわけですが、先生の想い出話など伺いたいと思います。

渡辺 私は県庁に就職しましたのでよく知っているんですが、当時工学部の用地の払い下げと現在の国道49号線から日大までの道路舗装の問題をかかえて、古田先生は度々県庁に来ました。来れば必ず現在の郡山市長の高橋さんの所に立寄って、計画と経過を話していく姿を見て、よくあの忙しい方が福島まで来られるものだと、非常に積極的に事を運んでいたのだなと感じていました。東京で開いた工学部校友会の懇親会のときも秘書が気をもんでいるにもかかわらず、わざわざ郡山の校友会が東京地区で懇親会を開いていたんだから、すぐ帰るわけにはゆかぬといって、長い時間歓談していましたね。工学部あるいは校友会への関心が深かったんだなという強い印象を持っています。こんなわけですから郡山に古田先生の銅像ができるのは当然であろうと思います。

武田 私の会長時代は学園紛争も終つて、荒廃した学園の整備が着々と始まりかけていました。古い方達ほど想い出があるあの木造の北心寮はすでになかったものですから、この場所に北心寮がありましたということを記すために、北心寮跡の記念碑を庭の一隅に建立しました。この当時ですね武道館が落成したのは。また丁度私のときは会員の総合名簿の発行時期だったので。これまで蓄積した資金の大部分がなくなる計算なんですね。大分討議を重ねてみました。会員の皆さんに実費負担をお願いしてはどうかとか、希望者だけに実費配布してはどうかとか、ではその希望申し込みをどんな方法で受けるかなどと、こまかい話になりましたですね、結局私のときは特別予算を組んで切りぬけましたが松山さんの時代は実費配布でしたね。

司会 そうですね、今年の実行予算がマイナス実行予算なんです。ですからもう早晚ですね。積立の方が減つて行くばかりなので心配です。だからといって、会費の値上げについてどこまでご理解いただけるか問題なのです。このへんがよくいけば多少会務も伸びると思います。資金の件はこのぐらいにしまして支部の結成と申しますか、組織をもう一つ堅めようという気運が出てきまして、太田さんの会長時代に具体的に支部というものに目を向け組織の拡充を重点事業としたわけです。このあたりから太田さんお聞かせ下さい。

太田 武田さんの後に自分が会長の大役を務めさせていただいたわけですが、渡辺さん、関根さん、根本さんと発足当時からそれぞれの時点で苦労され参られたわけですが、私は大変平和な時代に会長となりましたので、かねて組織の強化について重点的事業にする予定でおりました。武田さんの時代に第1番目の支部として東京支部が発足しました。私が引き継いだ段階では、東海支部、北海道支部とかこの他新潟、大阪とかいうような支部を検討したのですけど、現地の協力態勢が完全である東海支部が昭和47年に第2番目と

して結成されたようなわけです。東海支部の発会は70名近くの校友が出席し、こちらからも役員が4名ほど参りまして大変盛会でした。校友は卒業して17年から20年近くなるので同じ地区で活躍しているながら同門であることが判らないでいて、会場に集って何だ君も校友だったのかというような状況が多々あったわけです。また、支部長は私と同期の平野君、事務局長は私と同じ陸上競技部の河野君にお骨折りいただき、今日につづいているわけです。

根本 東海支部にしろその後の北海道支部にしろ、武田さん、太田さん、初代渡辺さん更に松山さん、これ皆土木の出身なんですね。校友会のためによく協力されているわけです。事務的な点では、各科の方にお願いしてきたようですが、長期組では半沢さん、佐藤さんがやってくれましたが、やはり土木の方達の力が大きかったと思います。本会が継続しているのもこの力があるからだということではないでしょうかね。

太田 北海道支部は48年に結成されたんですが、当時支部会員は約300名ほどだったと思います。北海道会館に集まつた校友同志は、強い横の連携をくみながらやつていこうということでその後大いにプラスになっていると思います。この後函館支会とか千葉支会というように支部の下に更に下部団体が生まれ、相當に根強い組織になってきました。

司会 現在大ざっぱな会員数は、正会員が17000名近く各地におるわけです。それで支部組織をつくろうということで、実は支部規約を検討しましてですね、具体的に全国の10ヶ所に支部を設けようと色々と働きかけております。支部の設置方法は、初年度を準備の年、2年目に支部を結成する年、3年目を発足初年度ということで3年間にわたって各年次10万円ずつ援助して行こうということで、支部を発足させるのには総計30万の資金が要るわけなんです。従つてむやみと支部をつくるわけにもいかないものですから、会員の多い地区を先にしたいと考えています。更に現在考えられているのは学部の就職ルートが関係しておりますので、なるべくその就職の真空地帯をうめるような地区も考えられています。実は今年は、去年すでに結成の働きかけをしてきた九州地区に武田会長に行っていただき、実情を見てきていただきました。順調であれば来年出来ると思いますが無理はいけませんから、地元の熱意の高まりを待つては九州地区に支部を発足させたいと期待していることです。

渡辺 校友会事務局が記念会館に移転したそうですが。

武田 はい、それでは現在の校友会事務局室についてお話し申し上げましょう。実は8月9日に、52号館部室棟からこのたび工学部創立30周年記念館に一切の管理を任されて移転したわけなんです。しかし実情



太田 氏

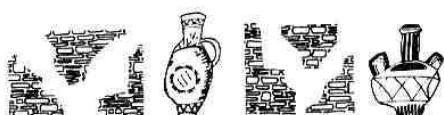
は一寸狭いのです。事務室だけですと間に合いますけれども、校友会には結構財産がありますので、一時隣の会議室をお借りして、そこに収納しているような状況です。先日、学部長先生にご挨拶に行つた時ですね、この事情を申し上げて参りましたが、まだどこに収納するかという決定は下されていないようです。校友会があのようないい處にありますと、学生諸君の出入りが多く、移った意義は大きいですね、下宿の問題で来る者や総合名簿を買って行く者が多いですね、準会員の学生諸君には名簿一部500円で売っていますが、就職先の決定などをする資料にしているようです。更に在校生にも校友会報は配っていますから、校友会への認識も大変深まっているのではないかと思っています。太田さんの時には、あの古い我々の建てた校友会館から部室棟という52号館へ移転したわけですが、そこは大変広い事務室と倉庫があり、種々雑多なものまで格納しておりましたのですが、それをここに持ちこんだものですから、記念館内が一杯になってしまいました。

司会 しかし、地の利は絶大でありますので物品の整理と処理を考え、何とか広くしたいと思っています。書類はすべて取つてありますが、これはうっかり燃やすこともできませんので、学部でやはり記念館内に資料保存室をつくるということで、そちらに提供しているわけです。なつかしい書類がたくさんありますね。また、太田さんの時代には現在電気工学科においてなる国分先生が工学博士の博士号をいただいたということですね。

渡辺 と続馨先生そうしますと工学部出身での先生博士号をとったのは化学の菊池光子先生と後藤先生、それに国分先生の4人ですか、これは良いことですね。

司会 30周年記念行事は松山さんの会長時代だったですね。

松山 私の任期は昭和50年、51年、52年度ですが、初代会長さんから、武田さんまでの歴代会長さんの種々な事業に関する苦労話をお聞きしたんですが、私の会長時代は皆さんの協力で幸運兒というか、この3年間というものはすでに基礎固めのすんだところに、会長というような役をおおせつかったような次第で、この席を借りまして心から皆さんにお礼申し上げる次第です。初年度50年の主たる事業については、武田さんの会長時代の45年がいわゆる総合名簿の発行をされましたから、会の規則に従えば次回は5年後ですから丁度50年に発行しなければなりませんので、太田さんに名簿作成特別委員会の委員長を依頼して内容や予算などについて、随分検討されて発行のはこびとなつたわけです。先ほど武田さんから、就職関係とかにも利用されていると伺つて、皆に喜んでいただいていると思うと、とてもうれしいです。校友の親睦はまず、名簿の発行からと思っていましたが、この総合名簿が多目的に利用されているということで本会の事業としてやはり重要なだと再確認しているところです。從来



の総合名簿と特に異なる点は、学部関係だけでなく前身の専門部の名簿も入れたということです。それから51年には事務局職員の白石先生が永年勤続10年になりましたので、総会の席上で表彰いたしました。白石先生には、まさに献身的というか模範的な事務管理をやつて頂きましたし、私ども本当に助かったわけです。また太田さん当時に結成された各支部に支部旗を贈りましたが、総会のシンボルとして親しまれているようですね。現在この会場の研修会館は、昭和51年5月24日落成式を行ないました。この建物は地上4階、地下1階で延べ面積1660平方mあります。施設も完備し、利用価値の高いものでして、日大でなければ出来ないものと思います。関係者には、本当に喜ばれているわけで私達校友の集まりも他へ行かないで、なるべくこの研修会館を利用すれば良いと思います。51年度の後半なんですが、郡山に日本大学工学部を誘致するにあたり最もご苦労なされた、古田重二良先生の銅像を建立しようという気運が、皆さんの中から出まして関係者が集まって協議しました。関係者と申すのは、日本大学校友会福島県支部、工学部校友会、工学部父兄会、東北高等学校も含む日本大学工学教職員の方々でした。翌年52年は、工学部創設30周年にあたるので記念式典をする予定であるから、その時期に銅像の除幕式をやりたいということで、スケジュールをたてこの関係者の中から実行委員会のメンバーを決め、早速本部に陳情に行ったりもしました。校友会は、役員の皆さんと共にいろいろと話し合いをしたわけですが、最初は校友会で建立しようというような話もでていました。しかし、このようなことは一人でも多くの御賛同を得ることに意義があるのでということで、みんなでやり完成したわけです。

武田 次に人事面から、校友会の話を聞きしたいと思うのですが事務局職員の方々、事務局長などについて聞かせて下さい、発会当時は何名の職員だったんですか。

関根 最初はね、副会長の佐藤圭一君が事務局長を兼務し事務局をあずかり、そこに小山田克己君が常任というか判然としてはいなかったのですが、事務局員のような形で校友会に来ていたわけですね。

渡辺 専任の事務局職員ではなくて、校友にですね、力を貸して下さいということでしたね。

半沢 小山田さんは当時高等学校の先生だったんですね。

渡辺 ええ、そうです。

関根 だから給料は払ってなかったと思うんですね。

渡辺 払ってないですね。みんな学校の近くに居る人達にやっていただくということですから。

関根 その後佐藤圭一君が辞めて、事務局長という立場ではないけれども、代理の形で小山田君が職責を果してきたということですね。その後工学部内にいる校友高野操君とか鳥羽君達がとにかく校友会を助けてくれましたね、こんなわけで給料をきちんと払った専

任校友会事務局職員はいなかったんです。

半沢 関根トミ子さんは何年からだったんですかね。

関根 彼女は、最初のいわゆる給料を与えた事務局職員ですね。

根本 この辺から、校友会が着々と地歩を固めてきているんですね。

武田 校友の先生には校友会は随分お世話になりましたね。細心の注意力と豊かな常識に随分救われましたですね。

司会 20年の中半分以上を白石先生にお世話になっているんですね。昭和41年5月10日に就職なされ、昭和53年5月31日に退職されました。現在は、昭和53年6月1日から影山英雄さんが来られて、先生に劣らず良く事務を管理されています。

根本 白石先生のことは渡辺さんが見つけたんですね。校友会の総会が終了して、すぐに渡辺さんに案内されて白石先生の家に行ったんです、それ以来のおつきあいです。もう12年も前のことになってしまったですね。

関根 広川先生がよく白石先生を知っていました。私は白石先生の人柄について、広川先生から伺ったんです。



武田 校友会のことも世の中のこともよく解っておった方ですから、紛争の時も良いアドバイザーだったし、細かいことでは会務の進め方、会報の編集、必要経費の算出などいろいろな方面で手落ちがないんですね、会長としては大いに助けられました。私が校友会役員を引き受けた事情をお話したいと思います。半沢さんと根本さんのお2人が、私の会社に来て、副会長を務めてくれというわけですね、でも自分は会社を持っているんだしこれを引き受けたら身動きができないのではないかと悩みましてね、良い返事ができないわけですよ。そうしたらですね、朝は来る、

夜は来るで特に夜来れば12時すぎ2時すぎまで、校友会のことばかり種々と話をして結局こんなわけだから引き受けてくれないかと言うわけですよ、もう私も最後には根負けして、ではとにかくその副会長とやらを一年間だけ引き受けましょうということで、校友会の役員になったんです。その後は約束はどこへやら、現在に致っているわけです。しかも会長の席を汚がしてね。一笑

半沢 当時を想うとね、無理を申しましたね。校友の役員は多かれ少かれ、こんな事情でやっていますね。あれがなければ今こうしておつき合いできなかつたのではないかと思っているんですよ。

武田 これからについては前会長さん達のご意見などをよくお聞きしまして今後に処して参りたいと考えているわけです。それで一つこれからは校友の再就職について充分な情報を提供したり、相談にのったりすることが必要ではないかと考えているわけです。現在学生達が自分の就職のことで校友会に来てますけど、これとは内容的に全く別のことですからね。

渡辺 今の話の中で感じることは、一般校友の人人が望んでいることは常に校友の消息を知っておきたいということだと思うんです。我々はいろいろな仕事を持っているわけですから、会員名簿を見て、自分の仕事にプラスになるよう考えられる場合がたくさんあるわけです。だから新しい情報を流すことは非常に有意義であるわけです。この点を考えますと名簿の発行などは、あまり間をおかないでしかもその関係する部分のところ単位にして、例えば県単位、専攻科単位とかにして発行するように工夫した方が県外にいる校友の人には良いんじゃないかと思うんですけどね。その居住場所以外に再就職などすることはないでしょうから。

半沢 そう意味ですね、コンピューターの導入はどうだろうかと思っているんですよ。

司会 今検討中なんですがね。

半沢 いついかなる時でも、いろいろな形で校友の



消息が分類された情報として出てくるように考えなければならぬと思っているんです。これには確実な住所などの資料が必要なんです。

関根 今のが、やはり校友会活動の本命なんですね。

太田 それはそうですね、名簿を作るっていうことが第一の使命だからね。

武藤 これがね、学校にも利用されまた校友にも幅広く利用されるっていうことです。

根本 名簿のことはですね、東京地区とか京浜地区の校友にとっては、学部単位の単独版では良く判らないので工科系3学部の合本した名簿を発行して、市販しようではないかという話がきたことがあるんです。これがあれば私も同じ日本大学だ、君は理工だが私は工学部だというようなことで意気投合するということで皆望んでいるということだったんですよ。この地区のように職種も多く校友も多いところでは、日本大学工科系の総合名簿を望んでいるんですね。ですからあまり金のかからないようなことでしたなら出してやりたいですね。各学部とも校友会員名簿は発行しているのだから、いずれそれを合本して市販することをどこかで考えたら良いと思いますね。

武田 在学生には、やはり何といっても就職のことが一番問題だと思うんです。渡辺さんから先程話がありました「校友の学生への講演」ですが、このようなものを盛んにやれば良いという気がします。実はこの7月に工学部の就職指導室の主催で、公開の模擬面接試験をやりまして、たまたま私とクラウン製作所の宗像さんと二人が試験官ということで参りましたのですが、非常に関心をもって学生諸君は見ていましたね。また特に校友会を通して、あるいは校友から求人のあったときには、就職指導室の配慮において、是非学生を向けていただこうにお願いしたいし、また先輩の方には逆に一人でも多く採用して下さるよう御援助を御願いしたいわけです。しかし、いずれにせよ学生に豊かな人間性と学力がなければなりません。そこで、やはり私も各科毎の土木は土木、化学は化学というように分けて、校友が懇談会とか模擬試験なんかをすると大変効果が上がるのではないかと思います。更に総合的な講話は、セミナーのような形で役に立ちたいと思うわけです。校友会が今後、下宿問題にしろ就職の問題にしろ学部とタイアップして共に補い合って行ったなら、更に発展するものと信じますので、みなさんの御協力、御鞭撻を御願い致します。本日は長い時間にわたって、お話しをいただき誠にありがとうございました。

司会 ふなれな司会でしたが、古い話から今後の校友会のあり方まで伺い、大事な資料をいただきました。ありがとうございました。

学園の声

校友に期待するもの

土木工学科主任
木村 喜代治



日本大学工学部校友会がその前身である土木工学科校友会を発展的に解消して創立されてから20年を経過し、その活動もいよいよ充実期に入りましたことをお慶び申し上げます。

校友の皆さん卒業されてから如何お過ごしでしょうか。社会での御活躍には御苦労も多いことと思います。御承知のように昨今円高ドル安の状況が一段と進みまして、いわゆる円高不況となっています。今年度のわが国のGDPは約210兆円といわれ、最近の為替レートからすれば軽く1兆ドルを突破し、アメリカの約半分ですが、国土が25分の1と言う狭い土地を考えれば大変な経済活動であるといえましょう。わが国経済の動向が世界の経済に及ぼす影響は大となり、世界各国から厳しい眼差をもって注視されております。国内景気の回復によって内需を増やし、また輸入にかかる制限を少なくすることによって輸入の拡大をはかることが諸外国から要請されております。これによってわが国産業の国際的競争力の弱い部門は保護すべきか、あるいは転換すべきか重大な岐路に立つことと思います。各界で御活躍の校友の皆さんは時代のすう勢に後れることなく、適確な判断によって対処され、御関係の事業が益々発展されんことを祈ります。

建設関係は昨年度以降、公共投資が景気回復の主要な柱として大幅に政府予算がついたことにより工事発注量が増大しております。これにより人材の必要性より卒業見込者に対する求人状況をみますに、大手建設業は手控えているところもあり、一方、中小業界は比較的に求人が多く来ています。校友の皆さんはよく御承知のように、地方自治体が地元業界の育成策を取っていることも一つの原因でしょうが、建設業界は大手の寡占化体制ではなく、それぞれの規模に応じた特色を發揮し得る場があるといえます。しかし高度成長時代とは違って事業の活動は容易ではありません。現代の困難な時代において適正な情報を得ることが大切であります。校友が集まれば種々な面でのより広範な情報が得られます。また校友が技術の問題や種々な問題

についてお互に切磋琢磨し向上を計ることが必要であると思います。ここに校友会の意義の一つがあると思います。

(工学部教授・工学部次長)

校友に期待するもの

機械工学科主任
一色 忠夫



日本大学工学部校友会発足20周年記念号の発刊を心からお慶び申し上げます。昨年は日本大学が郡山の地に専門部工科を移設してから30周年にあたりましたので盛大な記念式典が行われました。

現在学生数約5300名をようし、大学院博士課程前後期（修士課程及び博士課程）を持つ東北において有数の大学工学部に成長しました。これも卒業生諸君の母校に対するご援助と、校友一人一人の社会におけるご活躍のたまものだと思います。専門部工科の時代から第二工学部の時代を経て、現在の工学部に到るまであらゆる面で容易ではなかったと思います。発足当初は木造の兵舎跡で、実験器具らしいものも非常に少ない中で先生方と学生が一つになって頑張ってきました。また就職試験を受けに行って夜間の大学と間違えられることもしばしばでした。今は実験研究設備も充実し、各種運動施設も他の大学の羨望的になっています。この工学部の偉容を見て卒業生諸君も感無量のものがあると思います。工学部の卒業生は現在1万名以上になりました。どうか校友が一丸となり互に助けあって、更に全日大の校友と手を組み大いに活躍していただきたいと思います。諸君の活躍が日本大学工学部に対する最大の寄与となります。昨今円高等で一般に不況のムードがありますが、この時期こそ諸君の真価が認められる時だと思います。企業の一員としても、また経営者としても今がふんぱり時であります。自主積極的に独創性を大いに發揮して頑張って貰いたいと思います。

また工学部校友会は発足以来、校友の親睦融和をはかると共に学部に対して課外活動の助成、図書館に対する図書の贈呈、学生に対する下宿のあつせんなど色々お骨折をいただいております。学部の発展に寄与するところは大であります。最近は全国に工学部校友会の支部も次第にふえ、各地方毎に校友の団結も強くなっています。現在学生の就職は毎年100%決っておりますが、特に最近は自分の出身地近くへの就職を希望する者が非常に増加しております。機械工学科では就職希望者の8割以上が出身地近くへの就職を希望しています。この点からも全国におられる校友諸君が学生の就職にご協力くださいればこの上なく幸いです。

最後に校友諸君が自信を持って、あらゆる困難を打破せられ大いに活躍されるよう希望してやみません。ご健康とご多幸を祈ります。 (工学部教授)

校友に期待するもの

電気工学科主任 国分 欽智

我が工学部も開設30年の歳月を経て、校友諸氏の数は1万5千を超えることになりました。いま皆様は円高に対する我が国の工業と経済の確立のため、各職務で日夜渾身の努力を続けておられることと存じ、その健闘に心から感謝申し上げる次第であります。

それらの激務の間に先輩の校友の方々もそろそろ折にふれ、青春の心の故郷、本学をなつかしむ思いに心駆られることが多くなっておられるのではないか。そのときは、ぜひ郡山を訪れ、発展を続ける本学の雄姿に接し、諸先生とともに大いに語り合って下さい。活気を帯びる在学生達、往時には見られぬ充実した施設は校友諸氏に何とも言えぬ喜びと心の安らぎを与えることと存じます。

さて経営の基盤を主として学生と父兄に頼らざるを得ない私学としては、校友諸氏と在学生の熱烈な母校愛こそ本学発展の大きな原動力であります。母校愛とて決して難しいことを申す訳ではなく、本学と校友の発展に絶えず関心を持ち、何らかの形でそれに関与していただくということであります。上記のように折にふれ母校を訪問し、諸先生に近況を報告し、在学生を激励されるのもその一つであります。本学発展の各時代で過された各校友の意識はたとえ様々なものであっても、同じ学び舎で成長したという連帯感は同輩相互のみならず、先輩と後輩の連繋を緊密にし、官界産業界における校友諸氏の活躍に大きな力を与えるものと考えます。在学生が職を選ぶとき、彼等は求人要項に記載されている日大卒の社員の人数に大きな関心を持ちます。3年前発行された校友会名簿を頼りに業務拡張や指導、教示、意見の交換などをされている校友の例も数多く聞いています。私も先輩の誰々さんを紹介して下さいとの電話を受けることもあります。企業を営む校友からはぜひ後輩を採用したいとの求人申込をいただくこともあります。また立派に成長した本学を故郷の後輩や知人に紹介し、その子弟に進学をすすめた話も数多く聞いております。常に校友の心をよく反映し、本学の教育に積極的に協力され、校友会20年の活動を続けられてきた役員の皆様の努力もまことに素晴らしいものであります。校友諸氏がその身辺で、何らかの形で、相互にまた本学へ示される関心とその寄与がとりも直さず、母校愛であります。これこそ本学大躍進の基礎であり、校友の発展であり、喜び、誇りでなく

て何であります。校友の一人であり、本学の教員でもある私が痛切に感じ、校友諸氏に期待する唯一最大のものはまさにこの熱烈なる母校愛であります。いま本学は創立40年を目指して着々と発展の一途を辿っております。校友諸氏におかれても厳しい国際情勢下、我が国の工業界を背おって立つ氣概のもと、大いに精進、発展されることを念願し止まないものであります。

(工学部教授、電気工学科第1回卒)

校友に期待するもの

工業化学科主任 宇野原信行



新制大学第1回の卒業生（昭和28年3月出）以来早くも26年間を経過しようとしている、古い校友はやがて年令50才にさし掛けて來た。その第1回生から講義を受け持ったので、現在種々重要な地位に着いて活躍中の顔が先づ憶い出されるが、昔も大学出でから15年と良く云はれ、現在もほぼ同様に、既に夫々の社会の中心的存在になり、その影響も非常に大きくなつて、後に続く若き後輩も亦その過程を進行中であるが、これ等の校友の活動は直接・間接に日大と工学部の発展に大いに関係がある。例えば世の中が不況になった場合に4年生の就職問題にも活路を見出される、適した職場が得られ成果が挙げられ、ば学校の評価が上り、しいては多数の有能な将来性のある学生が集り、この良循環は年と共に更に輪を拡げて確立されて行く。

理工学部は戦前から在り、歴史も古いか、工業社会に基盤が相当に存し、サイクルが成立しつつある。工学部も後10年も経れば同じ関係のパターンが生れるものと予想されるが、工学部卒業生の努力に依って益々母校の声価を昇さねば。他を排撃する訳ではないが同じ出身同志が互いに励まし合って引けを取らない様に資本主義社会が競争であるとするならば、とげとげしくなるのでなく眞の意味の競り合いは進歩に繋がる。

以前の事であるが、折に触れ時に触れ、学生に「為せば成る為さねばならぬ何事も成らぬは人の為さぬなりける」とアドバイスしたことがあるが（本年の学部祭のテーマも偶然に同じ標題になった）、人間が何かを行えば必ず其の結果が直ぐ或いは何時かは表れる、たとえ、それが失敗に終つても、経験が得られる。いま、筆者の専門の化学はもとは鍊金術と言われ、卑金属から貴金属への転換を試みても、その目的は達せられなかつたが、途中の色々な化学変化の現象が現代の化学の礎となつてゐる事実が否めない。失敗しても諂めず、実施する前には充分の計画と見通しと準備と慎重な上にも慎重な注意を怠らなければ前進に連る。ルーチン

の仕事の他に etwas を創造し、プラスになるように心掛け、日々精進すれば成果が出る、どの様な結果になるか試行して見る事、未経験のことをするとき未知の可能性が存在し、確実な進歩がある。

末文になりましたが、老婆心ではありますが、常に前以て必ず健康に気を付けられ、大いに頑張って欲しい。日本大学の為に、工学部の為に、更に後輩の為に。
(工学部教授)

校友の諸兄へ

一般教育科
主任 西本勝之

昨年度は日本大学工学部の前身、日本大学専門部工科が郡山に移転開設されてから30年目に当たり秋10月には、30周年の記念行事が盛大に執り行われたことは校友の諸兄も熟知されている所だと思いますが、今年度は本学校友会の発足以来20年目に当り「光陰如矢」を切実に感ずる昨今であります、先ずは校友会発足20周年を心から御慶び申し上げる次第であります。

全くの草原に誕生した工学部は、歴代の日本大学本部および工学部の学内外の関係者、教職員、学生諸君、それに多数の校友の諸兄の筆舌に尽くし得ない努力と艱難の克服および不斷の根気とによって、現在では、開設当時には想像することも出来なかつた程の隆昌の時期を迎えている訳であります、真に「隔世の感あり」と言わざるを得ないと言う思いで一杯であります。

さて本年6月頃であったかと記憶して居りますが、工学部土木工学科の6回の卒業生の諸兄が同窓会のプログラムとして、工学部中講堂会議室において学校側教職員との懇親の時間を持たれたのであります、その席に出席させていただき、大変嬉しい想いを致しました。その折りに御集まりの諸兄が当時の第二工学部に在学中は、私は解析学と力学の講義を担当して居りましたが、若干の白髪と複数の皺に飾られた顔に昔日の好青年を求めて四方山の談に興じ、往時を偲び懐しさで一杯であります、既に社会の中堅として、また校友の大先輩としてそれぞれの選んだ道において大いに活躍されている様子を拝見して全く感無量であります。

工学部の一教師と致しまして当然のことであります、内にあって教育並に研究にこれ迄同様或はそれ以上の努力を惜します、工学部が、より高邁な哲学、より豊かな教養と人間性とを持った工学技術者を社会に送り出すよう今後一層の精進を重ね、質の充実した工学部に育て上げ度いと念願している次第であります。

日本全国から集った学生諸君は卒業と同時に校友となって全国に散り、校友総数は既に1万数千名に達す

ると聞きますが、校友の諸兄には、校友として且つまた人生のより良き先輩として、一層の精進をされます様御願い申し上げると同時に、有形無形を問わず工学部の今後の成長と発展を側面より大いに御支援いただく様御願い致しまして此の拙文を終ることに致します。

(工学部教授)

図書館の今昔

図書館長 廣川友雄

現在の図書館は、書庫約1232m²、閲覧室、自習室合せて約740m²、その他事務室などがあり、敷地の中央5層の建物の中にある。蔵書は約10万冊あり、最近の数ヶ年間、特に学術雑誌の充実につとめ、現在は1000種類を越え、そのバックナンバーも2万冊を越えている。これによって、文献抄録にも余り不便を感じなくなってきた。

図書費には本年度は6570万円が当てられているが、そのうちには、昭和46年以来、父兄会から継続寄贈の200万円と、昭和47年以来、校友会から継続寄贈の50万円とが含まれている。校友会からの寄贈分は、各科にわたる重要で基本的な書籍に当てており、教育、研究に大いに利用されています。

この稿をかりて謝意を表させて頂きます。

現状はこのようなものであるが、その発足から省みると今昔の感に耐えないものがあります。

昭和22年専門部が発足し、ついで昭和24年4月からは新学制に沿って専門部を学部に昇格しようということでした。その審査にあたり昭和23年秋、現地視察のために内藤多仲早大教授、真島正市慶大教授が来学されることになりました。審査の対象の重要な一つとして、図書の充足が含まれていた。当時の在庫は審査に耐えるものではない。そこで、先生方始め関係者に寄贈かたお願いした。その結果相当数の書籍が集まつた。書棚は敷地内の杉木立を伐採し、これで作った。棚板に杉皮が残っていたのを思い出す。免も角審査は無事終り、学部への昇格も果したのである。

昭和23年度以来、郡山市から継続寄贈の補助金は、昭和25年度からは年間30万円をすべて図書の充足に当てられ、昭和34年度まで続き、可成りの冊数の在庫ができた。その間、最初に寄贈して頂いた書籍は逐次お返しして行った。現在私の手元にも、当時寄贈してその後返して頂いた本が相当数ある。これらには書籍番号を記した古いラベルが貼ったまゝになっている。これは、昭和23年秋、審査の前夜まで大勢の学生諸君が手伝って貼ったものである。

昭和43年学園紛争により、図書館は共闘学生により占據されたが、その間書庫の入口の鉄扉は、彼らの手で鉄棒で熔接され、書籍の紛失は防がれていた。

その後、書庫の増築も行われ、その利用度も益々増大されて、わが学部の教育、研究の進展に大いに役立っていることは誠によろこばしいことです。今後は、さらに充実し、利用し易い図書館を目指して努力したいと思っています。

(工学部教授)

校友会に望む

工学部事務長 石田 昭二

第二次大戦が終結はしたものまだ日本の将来がどうなるか見当もつかず、国民の1人1人はその日の生活に追われていた昭和22年当時本学生みの親とも申すべき古田重二良先生の時代を見る冷静な慧眼によりましてこの郡山の地に工学部の芽は投ぜられました。その後の辛苦に満ちた道程は多々伺い知つてまだ余りあるところでありますが一つの学舎に生活を共にする師弟の愛と向学の意氣でこの困難を耐え忍び立派に乗りこえたことは今日の学園の姿が最も良く物語っていると申せましょう。お陰様をもちまして昨年御承知のごとく工学部創設三十周年の記念事業がつづがなく終了してこの輝かしい歴史に更に貴重な一葉を加えることができました。中でもこの三十周年を機に校友各位から澎湃として起つた古田重二良先生の銅像建立の声を日本大学は心よくききとぞけられ校友を中心工学部、附属東北高等学校教職員は勿論工学部父兄会、日本大学各学部等々の絶大なる御協力を得て予定に過ぐる淨財をいただき、かつて先生が工学部の構想を胸にしてたたずんだであろう学部本館庭園の一等地に建立することができましたことは校友の力のすばらしい結晶であると敬服いたしております。数えてみると工学部の卒業生は16,800余名であります。これは日本大学全体の卒業生に占める割合から申しますと決して多いものではありませんが、職域の内容について申し上げるなら資源に乏しい弱小国である日本の礎石として自らの力を可能な限りふりしづかり耐えに耐えて各界でその力をいかんなく發揮して現在の豊かな強い日本を造りあげた者達であると申して過言ではないと信じております。これも一重に工学部を卒業された各位の母校愛にみちた心意気がなせるわざであると誇らしく存じ上げ、私はあらためて工学部の日本の社会に捧げた力の大きかったことに心から満足すると同時に校友諸氏に対し衷心よりその苦労をねぎらい申し上げるものであります。このように工学部は今日社会的に非常に重い評価を受け益々隆昌の気運が横溢しておりますが、これに決しておごることなく今後とも大学の使命を常に自覚して学園の整備と陣容の拡大と強化を計つて参る所存であります。ともあれ本学の今後に必要なものは何と申しても校友各位のたゆまざる母校愛と御支援であります。校友が適切

なる職を得て充分なるご活躍があれば、すなわち工学部の真価を高めまた校友各自の自覚を促し社会の本学への期待は益々大きくなるものと存じます。どうか校友諸氏におかれましては、ある時は厳しく、あるときはやさしく同門の輩として鞭撻の言葉をかけ合い一致協力して共に精進していただきたいと思います。

現在工学部校友会は会則にのつとり学部発展のために多々事業を営んでおりますが特に卒業生の消息を正確に把握している卒業生名簿は他に比類のないものであります。これは就職事務を進めるのにこの上ない重要な資料となっておりますが、明年度には工学部父兄会と連繋して会員名簿のコンピューター化をすすめ、より内容の充実した資料を整い工学部の就職希望者の便宜を計ると伺っておりますが誠に時代の流れにのつとつた適切なる事業であると存じます。我々学部関係者はこのように常に母校愛と母校の発展に心血をそそいでいる工学部校友会に深い関心と強い期待をよせております。

今後も貴会が他の模範として益々御発展あられんことを祈念して本題のことばを閉じることといたします。

学生課窓口から見た学生気質

工学部学生課長 田嶋文義



工学部校友会創立二十周年誠に御同慶に堪えません。それを記念して本機関誌に掲載するからとのことで、標題を与えられた訳であるが、今の学生気質を曲がりなりにも浮き彫りにするには、彼らの生活環境を踏まえることは不可欠であり、大学の大衆化・世相の変化・戦後教育の影響・価値観の多様化などから学生気質の一端をかいしま見ることとする。大学紛争の終息からここ十年一般的に学生の社会問題に対する関心の低さ、自分の生活中心の現実的・個人主義的傾向と云うことであり、「無関心・無感動・無気力そして無責任いわゆる四無主義の様相を呈している」と云われている。テレビが初めて世に出はじめたのは昭和三十年頃、テレビの登録台数が万台を突破したのは昭和三十三年頃であり、そして丁度その頃今の在学生は生まれたのである。だから彼らは、テレビと共に生まれ、テレビと共に成長したとも云える。しかもテレビは視聴覚に訴えることもあって、身近なことに関しては意識・無意識に強い影響力がある。コンバ等での歌など現在流行の歌はもとより、自分達が育ってきた時のテレビマンガの主題歌が次から次へと動作入りで出てくる。そして又学生達は身近なことに関しては受動性が強く服装などにしても、ジーンズが流行すればジーンズ一色、多様なものがはやれば一見個性的なようではあるが、やはり没個性的なところで、それを追うように思われる。またいま見聞き触れてい

るものの背後に少しでも何か難しい問題が潜むことを察知するときには急に傍観し「しらける」ところが出来るのである。今の日本はかっての農耕文化から戦後急速に高度工業技術の文化へ変化し、倫理を道徳とした時代から豊かな消費の時代へ来て、学生達が生まれた頃から新幹線が運転され始め人工衛星が打ち上げられ、コンピューターが生活の中に入り、そして人々は正に自分の意志と関係なしに忙しく自律的に動く組織社会に組み込まれて生活万般が機能優先であり、プロセスより結果ばかりを追求しがちなのが現代社会である。学生達は感受性の豊かな幼年期を通じて影響されてないはずがない、具体的な面で言えば、例えばかっては、複写機などなかった。友人のノートを借りるにしても自分で写すけれども今日では、すべてコピーである。ついには文献を探す時でも、自分でしないで、すぐ他人に頼りたがる甘きが目立つのである。何から何まで整えられた環境の中で生活し豊かな情報があまり努力もしないで要領よく先の見えるところに安易に実現を期待することとなるのである。私の手元に昭和52年11月に実施した工学部の学生生活実態調査があるのでこれによれば、(1)工学部の受験動機が「他を不合格となった時のすべり止めとして」28%、「将来の就職を考えて」13%、「先輩、先生に薦められて」10%、(2)大学生活の目的をどう考えるか「専門的な知識や高度な技術を修得すること」36.5%、「豊かな教養を身につけ人格を陶冶すること」17.2%、(3)勉学態度はどのようなものか「授業にもほとんど欠かさず出席し教科書・ノートを中心として必要な単位を着実に取得するよう勉強している」36%、「授業・試験は要領よくこなし、カリキュラムの拘束をあまり意識せず人生社会の問題ととりくんでいる」18.1%、(4)現在受けている授業をどう思うか「満足・不満足なものがあるが、それ半々位」38.6%、「なかには満足なものもあるが、大部分は不満足である」29.9%、「大部分の授業には満足できるが一部分内容が難しいすぎたり、低かったりして不満なものもある」21%、(5)教師に対する要望や期待「知識の切り売り、形式的講義をやめもっと講義内容を充実させて欲しい」28.5%、「単に教室を媒介するだけでなく、学生にもっと個人的な接觸、対話の場をもって欲しい」25.8%、「研究者であるとともに良き教育者であってほしい」24.7%、(6)現在の不安や悩み「就職や将来の進路について」34.3%、「勉学上のこと」24.9%、(7)不安や悩みの解消法「読書、思索などにより自分で」33%、「なりゆきにまかせる」27%、「友人に相談する」23%、(8)課外活動への所属「所属している」50%、「全然属していない」33.8%、「以前属していたがやめた」16.4%以上学生生活実態調査項目を抜粋列挙したのであるが工学部における学生の意識としては私大連盟の全国調査と比して数字の上で好ましい方向を示し

ていると思われる。教育は申すまでもなく学生の諸能力の発展を助け学生が自ら自己実現できるように援助することであると考える。学生達は本調査において、教師と学問を通じての人間的接觸を強く求めているし「教師への要望や期待」の項で59%が、教師とのかかりを望んでいる。この事実を率直に受けとめて真剣に対応しなければなるまい。

工学部の施設について

工学部管財課長 佐藤 満夫

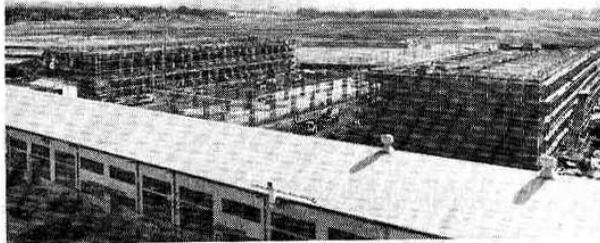


工学部の施設・諸設備について
は、すでに校友会報、工学部広報等で、周知のことと思われますが、その充実さは著しく年々目を見張るものがあります。校友会創立20周年記念特集号の発刊を機会に、学部名改称後（昭和40年）建設された諸施設について、年を追って簡単に紹介いたします。工学部所管の敷地面積は37万7千平方米で、これは全日本大学用地3千43万平方米の1.24%であり、本部所管、理工学部、農獸医学部に次ぐものである。建物面積は延8万2千平方米あり、日本大学建物面積の8.9%であります。ちなみに学生数は、5,400名（53年現在）で全日本大の6.3%であります。建物等主なるものは、昭和40年、41年度は創設20周年記念として建設された、体育館大講堂、記念図書館、42年、43年度には各科研究室を含む新実験棟3棟の完成をみた。45年から46年に各科専用の製図棟、これは学生が630名が最新の製図器を使用して授業が出来る設備である。46年から48年にかけて課外活動の為に、武道館、部室棟、公認50米の水泳プールが完成している。部室棟には、体育会、文化サークルのクラブが66団体、同好会26団体が各室を有し、諸施設を使用し恵まれた環境のもとでサークル活動を行っております。

49年から50年度には1,000名余りの学生が1回に授業のできる階段教室形の中講堂の落成、蔵書数10万6千冊（53年）を有する図書館の増築があった。51年から52年度には、郡山市荒池用地に建設した研修会館と工学部創設30周年記念館の建設がなされ、同年10月末古田先生銅像の建立除幕式、記念館の落成、30周年記念式典、工学部30年史の発刊とこれらは学部発展の歴史を飾るにふさわしい一大行事であった。

校友会事務局が部室棟からこの記念館内に移転したのが本年8月であり、この近代的で明るい事務室での執務は、益々校友会発展の一要因となるものと思いまます。このように過去10余年の歳月は、工学部教育、研究施設拡充へと大きく進展した時期であったと思いま

現況は……。53年から54年度の計画で施工中（写真）の、新々実験棟の新築工事であります。これは昭



和36年に各科学生実験用に建築された、鉄骨平家の6棟実験室が17年余を経た今では、学生数の増加に伴い狭隘であることとすでに一部老朽化していることが原因で、現在のテニスコート東側の敷地内に新築工事中のものである。この規模は、鉄筋コンクリート造2階建で、将来3階増築可能な構造である。A棟、B棟、C棟に別れ延面積各棟共2,700平方米を有するものであります。A棟には土木工学科、電気工学科が、B棟は建築学科、工業化学科、C棟は機械工学科、一般教育科の入室が決定している。この実験棟新築の暁には6棟実験室が移転され、各科の実験授業が増え充実されるものと思われます。移転後の6棟実験室は直ちに解体され、将来に向かって学園の環境整備へと計画されております。以上施設の現況をお知らせいたしましたが、校友の皆さんにはさぞ往時の面影の変貌に驚かれることでしょう。是非機会をつくって母校を訪ねてみてください。そして皆さんの御協力、御支援を得て更に充実した施設の整備につとめたいと思います。

(建築学科第6回卒業 工学部専任講師)

教務課の窓口から

工学部教務課主任 神村哲美

卒業生の皆様には益々お元気でご活躍のことと存じます。

さて、教務課からは例によって諸証明書の発行についてお知らせやらお願いを申し上げます。

- 教務課から発行される諸証明書につきましては、下記によって発行いたしますので、皆様方のご協力ををお願いいたします。
- (1) 電話による受付けは規定によっていたしておりません。そのほか、最近は卒業生数の増加に伴い証明書の発行部数が多いため、いろんなトラブルが発生しております。したがって、申し込みは封書か窓口においていただくな（代理でも可）による。
 - (2) 履修証明書、単位修得証明書は、用途によって異りますので、用途を明確に記入すること。
 - (3) 資格試験等についての問合せが多いようですが、それは直接その所轄機関に問合され、当方にはそれに必要な証明書のみをご請求下さい。



(4) 申し込みの際には、下記の事項をご記入下さい。

- ① 学生時代の所属学科
- ② 学生時代の学生証番号（わかれば）
- ③ 入学年、卒業年
- ④ 本籍

もし、本籍、氏名等学生時代と異なる場合は、事実を証明できる証明書（戸籍抄本）を添えて手続きをとられるように。

(5) 諸証明書の手数料は、下表のとおりです。

証明書の種類	金額	備考
卒業証明書 英文	100 500(オリジナル)	2部以上の場合コピー1部100円
成績証明書 英文	100 500(オリジナル)	2部以上の場合コピー1部100円
履修証明書	100	用途を明記
単位修得証明書	200	用途を明記
修得学科証明書	200	電気主任技術者資格申請書類

(6) 上記の諸証明書の手数料のほか、返送料も同封して下さい(切手可)。

【短信】 武田光二

開設と同時に本学部に奉職。教務課一筋30年。当時からはやっていた名物のひげも30年の雪霜を象徴するかのように白いものが多くなりましたが53年12月皆さんに惜しまれながら退職されます。

吉田宗（旧渡辺）

彼女も教務課一筋30年。当時はまだおさげの娘も、今では、すっかり貰禄がつきました。

半沢イネ子（旧安田）

証明書の係をして22年。皆さんから請求される諸証明書は、すべて彼女の手によります。

このほか、教務課の経験は浅いですが、佐藤光良、佐々木一巳、鈴木道代（旧大竹）、山口泉、永井義章、神村哲美が教務課に所属しております。

就職のあれこれ

工学部就職指導室主任 横山勇一



本学部の卒業の第1回生は昭和27年度であるが、その頃を回顧すれば当時経済復興がようやくその緒につき、制限貿易の緩和や25年の朝鮮戦争勃発により、特需景気による生産力の復興期であり戦後の猛烈なインフレもおさまりつつある時代であった。

当時は大学卒の就職の門途はきわめて狭く、本学部でも卒業期には一部の学生のみが、就職先を確保するといった窮状であった。

その対策として、本学部直接求人のほかに理工学部と連携のうえ理工学部に求人された書類の写が回付され、学生の希望する企業と折衝のうえ推薦するといった就職についてはきわめて厳しい時代であった。

昭和30年頃になると、就職状況が好転のきざしをみ

せはじめ、造船工業部門、重化学工業部門等の活況に端を発し、いわゆる神武景気となり本学部も就職については大分活況を是してくるのであるが、その後32、3年のナベ底不況の時代をむかえるわけである。

この頃になると他方において「技術系ブーム」の風潮が台頭し始め、工科系卒業生については厳しさのなかにも明るさをもてるようになった。

昭和34、5年になると、わが国の輸出量もようやく戦前の水準を回復し、日本経済も高度成長期に入ってくるわけであるが、一方企業側は今までと異り求人確保に大忙となり、いわゆる「青田買い」がおこなわれ始めた。

昭和36年頃になると本学部就職も飛躍的に伸びをみせ、就転指導委員も口を揃えて「一社主義」を提倡あるいは「先決主義」を要望するなど、短期間に大多数の学生が大企業に決定するといった有史以来の最高の景気が続いた。

ところが昭和46年になると「ドルショック」と円の切り上げに対する日本経済への将来に対する不安があらわれ、やがて49年の「オイルショック」により不況のかけりが拡がり始める。49年度は幸い本学部では夏休みまえに、ほぼ全員の就職先が決定していたため影響は少なく乗りこえることができた。

翌50年は、予想に反し景気が回復せず、後期になって一部の企業は慌てはじめ「採用取消」「自宅待機」などの一方的な自衛手段を講ずる波乱の多い年であった。

本学部でも一部の就職決定者がその対象となり不安を与えたが、私立大学連盟の指摘や労働省は各企業に強く自肅をもとめ、やがて低速経済時代をむかえることになるわけである。

最近、大企業の人員調整期もおえ、採用の伸びから以前に軒並み緩和されてきたが、中堅企業においては予想以上に若いエンジニアの人材確保に意欲をみせており、求人件数も卒業予定者をはるかに上回り数倍をかぞえている現状である。

これらの陰には、在学中は学間に情熱を燃やし、卒業後は艱難辛苦のすえ一方の旗頭となり、とくに戦後の産業界や公務の担い手となった先輩校友の活躍実績こそ、わが工学部就職の大きな根源となっているといつても決して過言ではないと思われる。

俊英学寮の今日

工学部俊英学寮舍監 田 中 伝

日本大学工学部が郡山に創設されたことは、工学部30年史に詳しく記されています。

その当時の学生諸君の住いとして、北心寮が併設されていて師弟共々、文字どうり起居を同うして勉学に勤んだことも生き生きと語られています。

本学30年の歴史の祖礎たる中から育ち行かれた校友の

皆様に、寮について申し上げるのは、初めの舍監さんであった外木薫蔵氏や、次の舍監さんを長く勤められた池田清藏氏のお二人が適任であるわけですが、お二人ともすでに亡く、誠に残念に存じます、しかし、若い時代に親しくお二人の先達と交わられた皆様には、人生観や生き方の中で、感化されたことや、教えられたことが脈々と流れているものと察し、本職冥利につきると、今更ながら感に耐えないところであります。

私事について申し上げれば、私は戦後南方から日本に帰りまして、永く教職を務めましたが、昭和42年に工学部の俊英学寮に舍監として就職しました。

すでに北心寮は無く、その跡地には立派な図書館が建てられました、寮名も日本大学工学部俊英学寮と変り、校地の最東端、金屋部落よりに建っております。聞くところによれば、訪ね来る校友は、あまりに美しく整備された現在の学園に驚嘆の声を発すると同時に「あの北心寮はどこですか」とかってすごした青春の地を懐しみ求めるとのことでした。

こんな事情が、かつて北心寮の入口のあったところに、校友会が「北心寮跡」なる記念碑を建立したのであります。本学を創設した古田重二良先生の銅像の足下にある、この想い出を印す碑は、姿こそ小さいが、本学を築立った群像の想いが、限りなく重積しているものといって過言でないと存じます。

さてその後の寮について語らねばなりません、我々の古い時代に育った者は、修業時代には臥薪嘗胆と称して、自分を精神的にも肉体的にも鍛える時だから、「他人様のところでメシを食う」ということは、単に経済的な問題ではなく、一つの修業の場であると、自他ともに認めていたのであるが、このごろは、最近の社会風潮が色濃く学生諸君の上にも影を落し、昔風の蛮からな者は少なくなり、良く申せば静かな学生、悪く申せば、気迫不足で、二百名程の寮生がありますがプライバシーがどうのということで、他人様の束縛を好みない者が多く、ややもすると昔のような家族的雰囲気が少なくなってきたようです。

入寮期間は一年次生当時の一年間で、そのごは下宿になるのですが、これも昔の小規模な、下宿生5人とか6人の下宿屋さんは、学校付近に林立する、収容員数40人とか50人の大型下宿業、あるいはアパート業者らによって淘汰されてだんだん少なくなっていました。これもまた、時代の流れであります。教育効果の点で学校の苦勞は増すばかりであります。

私は今、工学部学生手帳の中にある北心寮々歌に目を移しています、これには工学部に学ぶ者の意氣と気迫が若者らしい純粹さで詩われています。

寮名こそ変りましたが、時移り、人が変っても、学生諸君の歌う寮歌をきくと、何か熱いものがこりあげて心の裡を満たしてきます。

校友会創立20周年を祝し、かつ校友諸君の健闘を祈る。

校友の所感

真摯に取組めば……

藤原正臣

光陰矢の如しとか、月日の経つのは全く早いもので、過ぐる昭和33年3月、想い出多い学舎を後にしてから、二十年の歳月が、瞬く間に過ぎ、不惑の年代を迎えてしまった。

何時ぞや、某氏が、総理の椅子を去るに際し、「私の今までの人生は、後を振り返る暇もなく、只ひたすら、まさに、馬車馬のように走り続けて、今日に至った」と云われたが、私も、全く同様の状態で、現在を迎えていた。と云うのは、先般、土木第3回生の、平野卓先輩から、一筆書けと頼まれ、一旦はお断りしたが、私は県庁勤め、先方は建設省と云うことで、何かと、お世話になるので、断り切れず、ペンを取ることになり、困らずも、過ぎ来し方を、振り返る機会に恵まれたからである。

ところで、振り返る暇もなく、走り続けて来た私にも、一つの目標があった。これは既に多くの方々が口にされ、また、この校友会誌にも、投稿されていたように、記憶しているが、自分達の年代は、学歴社会の典型的な時代であった。官学と私学の差は歴然で、私学では、○○大学の××学部が良いと、わずかに、有名私大のいくつかが、評価されるに過ぎなかった。

ご多聞に洩れず、総合評価では、第二工学部は、非常に低いもので、「何だ、郡山か」と蔑視の感なきにしもあらずだった。

就職して間もない或る日、「何だ、第二だったのか」と云われたとき、「そうですよ」と、平然と答えながらも、心中和やかではなかった。そして、「よし、何時か評価を変えてやるぞ」と自身に云い聞かせ、一つの目標を立てた。

それは、官学と云っても、いわゆる駅弁大学と云われるものが、かなりあるではないか。

旧帝大ならいざ知らず、免に角、仕事でも、何でも、ガムシャラにやると云うことだった。しかし、間もなく、仕事だけでは駄目だ。何か他にと考えた末、卒業間近に知った技術士試験に挑戦してみることにしたのである。

ところが残念なことに、出先機関の現場担当では、多忙、多忙の明け暮れで、思うようにならず、無為に歳月を送ったが、昭和41年、本庁勤務になったのを契機に、暇をみつけて取組んでみた結果、天祐神助もあってか、念願成就した。

その後、人伝に、「なかなかやるな」と云われていると聞いた時は、全く、「我が事成れり」の感一入だった。



歐米では、就職のとき、「君は、何ができるのか」が先で、家族関係や学歴は、二の次だと云われている。

ここ数年、我が国でも、学歴社会から、実力社会えと、意識変革が進みつつあるが、未だしである。とともに、やはり、良いと云われるところは、それなりのことがあるよう思える。そうは云っても、個々人の実力評価による時代が、もうすぐそこである。

先頃、中部地方で開催された、就職懇談会の席上でも、先輩達は、自分自身のためのみならず校名輝誉のために、日夜、頑張っているのだから、人間として評価される学生を送り出すことが、より一層、工学部の評価の向上につながるので、よろしくと、来名された先生方に、申し上げてある。

また、先般、折あつて母校を訪問したが、全てが充実しつつあるのを見て、こんなに良い環境の中では、さぞかし優秀な者が、育まれるであろうと思うと同時に我々も後輩達の為に、不断の努力を重ね、胸を張って「郡山だ」と云えるように努めなければと…………。

こんな思いは、一人私ばかりではあるまい。

(土木工学科第6回卒業、工学部校友会東海支部)

(現在 静岡県浜松土木事務所都市計画課長)

校友会と共に歩んで

初代事務局長としての数年間

工学部校友会監査 高野操



校友会の発足以来20年と云うことで、私も感動一入と云ったところです。昭和30年に卒業し、3年後の33年母校に就職しましたが、その年に校友会が発足したわけで、何やら因縁めいたものを感じているわけです。発足時のころはタッチしていましたが、34年に「校友会館」が建つたころから校友会との付き合いが始ったわけです。記録によると、35年に機構の整備で事務局長がつくられ、35年から4年間、初代の事務局長としてその任に当つたわけです。

そのころ、事務局には専任として有用な小山田君と関根嬢がいて、私はもっぱら大まかな事をしていれば良かったわけで、苦労もありましたが、なつかしい思い出ともなっています。

校友会事務局の仕事は ①会員の消息の把握 ②会報による情報の流布が基本であるとの考え方から、昭和35年10月に「校友会報第1号」を創刊しました。39年からはそれまでの1回から2回になり、今に続いていることは、同慶の至りです。

事務局長時代のもう一つの仕事は、校友会の東京地区懇親会でした。郡山の田舎者が花のお江戸で会をもとすると云うものですから、聞くまでは何かと大変なこ

とでした。昭和38年3月24日、赤坂プリンスホテルで開催、出席校友は109名、招待客としては、古田重二良会頭、江崎伸市学部次長、広川友雄学監等々で、仲々に盛会でした。その席上での古田会頭の挨拶は、日本大学は今や総合大学としてその規模、予算、研究などの面で斯界をリードし、校友の活躍は世界をかけめぐり、誠に目をみはるものがある。また第二工学部も着々整備され、15年前の創設当時とは雲泥の違いとなってきたことは、地元初め教職員、校友、学生のおかげと常々思っている。一つの学部の校友会の集まりに、こんなに多数の人が集まることは余り例をみずこのことからも第二工学部の卒業生の母校愛の熱心なことがうかがわれる。今後のご発展を祈る。

と云うもので、日大の中でも母校愛に満ちた学部であることが読みとれ、その勢が現在も続いていると思っています。

もちろん事務局長一人で仕事ができたわけではありませんが、卒業式当日の祝賀会、39年11月の「校友の学生への講演会」、アカシヤ育英会など、思い出に残ることが一ぱいです。

先に述べましたように、校友会は一部の人達のための会であってはならず、会員の消息、情報の流布が基本であろうことは今も変りないと思います。情報化時代に対応した「会員のコンピューター処理」なども考えて良い頃だと思いますが、いかがでしょうか。

(工業化学科第3回卒業・工学部助教授)

初代事務職員としての想い出

安藤トミ子(旧姓・関根)

校友会発足以来20年をお迎えの事おめでとうございます。私が校友会の事務局に職員としてお世話になりましたのは34年からでした。月日の経つのは早いものですね。当時正門を入って管理棟に向かう道路の右手の森の中の木造1号館一室にありました。会員の数も900名足らずと記憶しております。宛先を書き終りほつとしているのも束の間、不明「あて所見当らず」の封筒がどっきりもどって来て今度こそと何度も調べ直して名簿の一覧に記入出来た時はほっと致しました。その後モルタルの二階建の校友会館が落成されそちらの方で仕事をさせていただきました。一階が学生ホール、二階は事務所がありました。会館が出来てからは下宿斡旋など始まり学生や下宿屋さんが訪れ活気あふれた日々でした。未熟者の私でしたが、皆様の御指導のもとに仕事が出来た事を感謝致しております。その後会長さん初め役員の皆様、優秀な事務局の方々のもとで大きく発展され会員も1万数千名にものぼるとの事20年の歩みは皆様の努力の賜とこの上もない喜びと存じます。私も上京以来当方で時折新聞等で会員の方々の御活躍を知り心強く感じております。とりとめのない文になりましたがお祝いの言葉とさせていただきます。会員皆様の今後の御活躍と御健康をお祈り致します。

(元校友会事務職員34.4~38.12.勤務)

校友会に勤務して

白石 實



～はじめとおわり～

「校友会」とは何をするところであろう？予備知識のないままに事務に当ることになった。昭和41年5月である。スタートを切った以上は、今後いかなる問題・障害・勧誘等があっても、動搖することなくその責務を果たすこと。これが私の初心であった。

しかば、何をなすべきか、何といつても知ることが先決であると判断し、そのために次の方針をたてる。

- (1) 校友会規則・関係諸規則を勉強すること。
- (2) 役員各位の説明を聞き、指導を受けること。
- (3) 諸帳簿・諸記録・各種資料を調査検討すること。
- (4) 母校との連携を緊密にし、指導と協力を得ること。
- (5) 同僚の女子職員は勤務の先輩である。手ほどきを受けること。

以上のよりどころを指針として日々の事務に当たり、徐々に会の使命を把握することができた。かくて幾年かは過ぎた。私の勤務態勢も年々歳々大体同じパタンで繰り返された。そうしたうちにも世相は刻々と変わり、母校は日に日に隆昌に向かい、校友は年々に増加の一途を辿っている。静かに思慮をめぐらすと、果してこの勤務で良いものだろうか？一抹の不安と疑問を持つようになり、自信を失いかけて来たのである。本会が新たなる展望に向かって前進するためには、このマンネリズム化の刷新を図ることであり、このためには清新なる感覚と、創造性豊かで、能率的な才能の必要であることに結論が達したのである。これが退任の要因となり決断を促したのであった。去る昭和51年には永年勤続により表彰の光栄に浴し、退任に際しては色々と御配慮を賜わり感激に堪えず、本紙を拝借して深甚なる謝意を表する次第である。

～所感～ 部外者として誠に僭越であるが、所感の一端を述べさせていただきたい。20年の歴史を持つ日本大学工学部校友会は、30年の伝統に輝く工学部を母校として存在しているからには、母校の発展と共に永遠に存続と進展とを期することが、校友の熱望であろう。母校を愛し、恩師を慕い、お互いの親睦を深めるという美しい心の結び付きによって設立され、皆んなの力によって、育ってきたのであるから、更に大きく大きく成長させたいものである。どうぞ校友1人1人が自分の会であるという認識を深め、暖かく見守り、協力して推進されるよう希望します。運営に当る役員各位は、奉仕的精神をもって積極的に活動している。私は何時もその姿に接し、敬意と感謝を捧げて参りました。去るに臨みこの事実をお知らせすると共に、母校ともども隆昌発展されるよう祈念して擱筆する。

(元校友会事務職員41.5~53.5勤務)

日本大学工学部校友会年表

昭和

- | | | | |
|----------|--|----------|---|
| 22・4・1 | 日本大学専門部工科を東京より福島県田村郡守山町徳定字中河原1番地に移設された。 | 40・5・9 | 昭和40年度第8回総会開催された。 |
| 24・4・1 | 日本大学第二工学部となる。 | 40・8・20 | 昭和40年版会員の総合名簿を発行した。 |
| 25・3・25 | 専門部工科第1回生卒業 | 41・3・25 | 昭和40年度第二工学部第14回生卒業 |
| 26・3・17 | 専門部工科第2回生卒業 | 41・4・1 | 日本大学第二工学部が工学部と改称された。よって同時に日本大学工学部校友会となる。 |
| 28・3・22 | 昭和27年度第二工学部第1回生卒業 | 41・5・8 | 昭和41年度第9回総会開催された。 |
| 29・3・19 | 昭和28年度第二工学部第2回生卒業 | 41・10・23 | 会則改正のため臨時総会開催された。 |
| 30・3・21 | 昭和29年度第二工学部第3回生卒業 | 41・10・25 | 工学部創立20周年記念式典が挙行された(学部) |
| 31・3・21 | 昭和30年度第二工学部第4回生卒業 | 42・3・25 | 昭和41年度工学部第15回生卒業 |
| 32・3・25 | 昭和31年度第二工学部第5回生卒業 | 42・4・23 | 昭和42年度第10回総会開催された。 |
| 33・3・25 | 昭和32年度第二工学部第6回生卒業 | 42・12・17 | 日本大学工学部下宿対策委員会発足した(学部、校友会、学生自治委員会) |
| 33・5・22 | 校友会創立、日本大学第二工学部校友会として発足し第1回総会を郡山商工会議所にて開催された。 | 43・3・25 | 昭和42年度工学部第16回生卒業 |
| 34・3・25 | 昭和33年度第二工学部第7回生卒業 | 43・4・14 | 昭和43年度第11回総会開催された。 |
| 34・5・17 | 昭和34年度第2回総会開催された。併せて校友会館の新築落成式を挙行した。 | 43・10・25 | 学部紛争により仮会務所を市内堂前町2-14に設定執務する。 |
| 35・3・25 | 昭和34年度第二工学部第8回生卒業 | 44・2・2 | 臨時総会を開催し学部の紛争解決に協力態勢を協議した。 |
| 35・5・15 | 昭和35年度第3回総会開催された。 | 44・2・24 | 学部紛争解決により市内の仮事務所を構内にもどす。 |
| 35・9・20 | バス待合室を校内敷地に設備し学部へ寄贈した。 | 44・2~3 | 校友会館の事務室拡張工事実施する。 |
| 35・10・15 | 校友会報を創刊 全校友に贈った。 | 44・3・23 | 昭和43年度工学部第17回生卒業 |
| 35・11・1 | あかしや育英奨学生制度をつくり、はじめて奨学金を支給する。 | 44・4・20 | 昭和44年度第12回総会開催された。 |
| 36・3・1 | 学生への宿所斡旋を本会事業として実施することにした。 | 44・9・10 | 前会長根本年雄 日本大学評議員に委嘱される(任期3和) |
| 36・3・25 | 昭和35年度第二工学部第9回生卒業 | 45・3・25 | 昭和44年度工学部第18回生卒業 |
| 36・5・21 | 昭和36年度第4回総会開催された。 | 45・4・19 | 昭和45年度第13回総会を東京にて開催された。 |
| 37・3・25 | 昭和36年度第二工学部第10回生卒業 | 45・7~12 | 母校に寄贈の大時計及び時計台設備のため校友から寄付金募集。 |
| 37・5・27 | 昭和37年度第5回総会開催された。 | 45・12・1 | 昭和45年版校友会員の総合名簿を発行した。 |
| 38・3・24 | 東京地区校友の懇親会が東京にて開催された。 | 46・1・14 | 「北心寮」跡に記念石を寄贈した。 |
| 38・3・25 | 昭和37年度第二工学部第11回生卒業 | 46・1・16 | 時計台の竣工除幕式が行われた。 |
| 38・5・26 | 昭和38年度第6回総会開催された。終身会費制を新設した。 | 46・3・25 | 昭和45年度工学部第19回生卒業 |
| 39・3・25 | 昭和38年度第二工学部第12回生卒業 | 46・4・10 | 工学部校友会東京支部結成された。 |
| 39・5・27 | 昭和39年度第7回総会開催された。 | 46・4・18 | 昭和46年度14回総会開催された。 |
| 39・7・21 | 校友会館を構内敷地の東側に移設した。 | 46・10・17 | 校友会館移転について臨時総会が開催された。 |
| 39・11・7 | 校友と学生との懇談会を開催した。 | 47・3・25 | 昭和46年度工学部第20回生卒業 |
| 40・3・25 | 昭和39年度第二工学部第13回生卒業 | 47・4・23 | 昭和47年度第15回総会開催された。あかしや奨学生制度を改め、あかしや図書供与費として援助することに決定した。 |
| 40・5・1 | 郡山市と安積郡管内及び田村郡管内的一部の町村が合併し、新郡山市となる。
所在地 郡山市田村町徳定字中河原1番地となる。 | | |

- 47・9・2 工学部校友会東海支部結成された。
- 47・9・10 前会長武田仁幸 日本大学評議員に委嘱される（任期3年）
- 48・3・25 昭和47年度工学部第21回生卒業
- 48・4・22 昭和48年度第16回総会開催された。
- 48・4・26 校友会事務局を工学部第52号館の部室棟に移転した。
- 48・12・25 東磐梯寮に電池時計3個寄贈した。
- 49・3・19 鈴木総長の揮毫を刻記した記念石建立資金を学部へ贈る。
- 49・3・25 昭和48年度工学部第22回生卒業
- 49・4・21 昭和49年度第17回総会開催された。
- 49・6・4 日本大学工学部校友会旗を作成した。
- 49・7・20 工学部校友会北海道支部結成された。
- 49・10・17 日本大学専門部工科（郡山）の卒業生名簿を発行した。
- 49・11・2 旧校友会館建物を学部の火災実験に使用された。
- 50・3・24 昭和49年度工学部第23回生卒業
- 50・4・20 昭和50年度第18回総会開催された。
- 50・9・10 前会長太田雄八郎 日本大学評議員に委嘱される（任期3年）
- 50・10・20 昭和50年版校友会員の総合名簿を発行した。
- 51・3・24 昭和50年度工学部第24回生卒業
- 51・5・23 昭和51年度第19回総会開催された。
- 51・6・30 日本大学郡山研修会館へ記念品代を贈る。
- 51・8・9 校友会支部旗を作成し東京、東海、北海道の各支部へ供与した。
- 52・2～8 古田重二良先生銅像建立寄付金募集。
- 52・3・24 昭和51年度工学部第25回生卒業
- 52・4・10 昭和52年度第20回総会開催された。
- 52・10・28 古田重二良先生銅像の除幕式が行われた。
- 52・10・29 工学部創立30周年記念式典挙行された。（学部）
- 53・3・24 昭和52年度工学部第26回生卒業
- 53・4・22 昭和53年度第21回総会開催された。
- 53・8・9 校友会事務局を工学部30周年記念館内に移転した。
- 53・9・10 前会長松山光克 日本大学評議員に委嘱される（任期3年）

校友会、歴代役職員表

年 段 別	会長	副会長	事務局長	事務職員
第33				
34	渡辺幸夫 (土1回)	佐藤圭一 (化1回)	関根昭一 (電2回)	
35			渡辺幸夫 (土1回)	
36		鳥羽重幸 (電1回)		
37	関根昭一 (電2回)	相沢千昭 (土1回)	菅野宗和 (機2回)	
38		諫佐達也 (建1回)	後藤尚 (化2回)	
39		太田雄八郎 (土3回)	菅野宗和 (機2回)	
40	渡辺幸夫 (土1回)	関根昭一 (電2回)	三沢好夫 (建4回)	
41		根本年雄 (機4回)	高野操 (化3回)	小林秀一 (土7回)
42		三沢好夫 (建4回)		
43	根本年雄 (機4回)	武田仁幸 (土3回)	半沢忠 (化6回)	柳沼福夫 (機5回)
44				半沢忠 (化6回)
45		鈴木光保		小林剛 (建15回)
46	武田仁幸 (土3回)	太田雄八郎 (土3回)	半沢忠 (化6回)	半沢忠 (化6回)
47				武藤貞泰 (土8回)
48				佐藤光正 (機9回)
49	太田雄八郎 (土3回)	武藤貞泰 (土8回)		佐藤光正 (機9回)
50		松山光克	半沢忠 (化6回)	小野沢元久 (機13回)
51	松山光克 (土3回)	武田仁幸 (土3回)		
52				佐藤光正 (機9回)
53	武田仁幸 (土3回)	太田雄八郎 (土3回)		影山英雄

工学部卒業生累計表

卒業回数	卒業年度	土木工学科		建築学科		機械工学科		電気工学科		工業化学科		合 計	
		人數	累計	人數	累計	人數	累計	人數	累計	人數	累計	人數	累計
1	27	32		17		12		28		15		104	
2	28	18	50	9	26	2	14	6	34	8	23	43	147
3	29	36	86	15	41	12	26	11	45	12	35	86	233
4	30	37	123	16	57	26	52	31	76	4	39	114	347
5	31	53	176	35	92	37	89	30	106	6	45	161	508
6	32	89	265	71	163	40	129	51	157	16	61	267	775
7	33	56	321	43	206	69	198	47	204	12	73	227	1,002
8	34	48	369	58	264	85	283	57	261	18	91	266	1,268
9	35	49	418	89	353	122	405	78	339	40	131	378	1,646
10	36	67	485	104	457	125	530	110	449	51	182	457	2,103
11	37	38	523	113	570	189	719	83	532	37	219	460	2,563
12	38	78	601	132	702	166	885	142	674	83	302	601	3,164
13	39	140	741	205	907	190	1,075	144	818	104	406	783	3,947
14	40	161	902	211	1,118	147	1,222	138	956	135	541	792	4,739
15	41	151	1,053	185	1,303	174	1,396	128	1,084	66	607	704	5,443
16	42	152	1,205	165	1,468	138	1,534	109	1,193	55	662	619	6,062
17	43	148	1,353	243	1,711	168	1,702	116	1,309	49	711	724	6,786
18	44	178	1,531	284	1,995	125	1,827	132	1,441	69	780	788	7,574
19	45	234	1,765	296	2,291	207	2,034	160	1,601	99	879	996	8,570
20	46	268	2,033	306	2,597	230	2,264	194	1,795	94	973	1,092	9,662
21	47	222	2,255	336	2,933	180	2,444	192	1,987	101	1,074	1,031	10,693
22	48	273	2,528	438	3,371	263	2,707	208	2,195	91	1,165	1,273	11,966
23	49	273	2,801	363	3,734	252	2,959	211	2,406	80	1,245	1,179	13,145
24	50	263	3,064	383	4,117	229	3,188	186	2,592	105	1,350	1,166	14,311
25	51	279	3,343	394	4,511	249	3,437	220	2,812	103	1,453	1,245	15,556
26	52	314	3,657	407	4,918	223	3,660	208	3,020	97	1,550	1,249	16,805

CAMPUS

mini-MEMO

◆岡部菅司先生御逝去

元一般教育科（英語・法学・経済学）教授岡部菅司先生は、昭和53年8月5日早晩、須賀川市の自宅で逝去されました。享年91才でした。

先生は、昭和26年11月1日に専任講師として教鞭をとられ、28年2月1日に教授嘱託になられ、39年3月31日に定年で専任を退職されましたが、以来、死の直前まで非常勤講師として講義を続けられました。27年間も教育に情熱を傾けられ、わが工学部の興隆発展に貢献され、学生に幾多の教訓を与えました。

右の写真は生前の岡部先生を囲んでのものであり、昭和40年ごろと思われます。



◆第二工学部・工学部の役職

52年10月に発刊された『日本大学工学部30年史』には、学部の役職にあつた方々のことが詳しく掲載されていますが、その主な役職について一目でわかるように右のように図表化してみました。

昭和24年に第二工学部が誕生し、41年に工学部と改称しましたが、基礎をつくられた方々に、感謝したいものです。

◆工学部資料室委員会が発足

『30年史』の編さんの一環に収集された膨大な資料の整理にあたるかたわら、学内外から新たな資料を集めて整理し、集中管理するために、資料室委員会（室長広川友雄教授）が53年4月に発足し、活動を始めています。

整理のできた資料の一部は、昨秋の学部祭の折りに、30周年記念館の展示室に展示されて、供覧されました。

校友の人で、古いクラブ活動などに関する資料がありましたら、ご提供いただきたいそうです。複写をして本物はお返しし、そのコピーを保存して、必要に応じて展示したいとのことです。

(た)

	学 部 長	学 部 次 長	事 務 局 長	事 務 長	総 理 長
昭和 24	4月				
25					
26					
27					
28		4月			
29					
30					
31	横地伊三郎 (兼任)				
32					
33					
34					
35					
36					
37					
38					
39					
40					
41					
42					
43	8月 広川友雄	8月 広川友雄			
44					
45					
46					
47					
48	3月 野引勇	5月 外木有光	2月 幸田太一	2月 片山将道	
49			3月 片山将道	4月 高桑昇	
50					
51		4月 外木有光	3月 熊沢寛	2月 宗像保次	
52			7月 11月 後藤弘	7月 深浦泰治	
53			12月 影山日出三		

心得、臨時、事務取扱などの期間も含む

測量器械・電気計測器・土木計測器・環境計測器・理化学分析器・真空分析器・真空機器・教育設備機器・光学測定器・各種材料試験機の総合商社



株式会社 旭商会仙台店

代表取締役 和田 朝雄

常務取締役 和田 岑生(電気工学科昭和36年卒業)

仙台市上杉一丁目9番38号 電話 仙台(022)21-7501 代表
テレックス 852-788

綜合建設業

秋葉工業所

専務取締役 秋葉 幸一郎

(土木工学科5回卒業)

本社 / 福島市宮下町8-21

電話(0245)34-5776番

営業所 / 福島市鳥谷野字南光原23-1

電話(0245)46-9186番

—小型電球用カラーキャップ—

工業用ゴム
製品、製造販売 ASA-COLOR

株式会社 朝日ラバー

代表取締役 伊藤 巍(工業化学科4回卒業)

横山林吉(〃 24回卒業)

戸田勝美(〃 25回卒業)

埼玉県川口市江戸袋上留377

電話(0482)85-2251 代表

株式会社 石井組

代表取締役 石井 久雄

(土木工学科7回卒業)

北海道斜里郡清里町羽衣町30

TEL (01522) 5-2316(代表)

出張所 / 斜里郡斜里町本町

TEL (01522) 3-2647

総合設備業

上下水道工事設計・施工

建設大臣登録(特-52)第7813号

飯島設備工業(株)

代表取締役社長 飯島 洋輔

本社 / 水戸市見川五丁目113 ☎ (0292)51-2111

東京支店 / 千代田区神田東松下町28神田兼松ビル ☎ (03) 252-6555

土浦営業所 / 土浦市東崎町10-13 ☎ (0298)21-3992

創業大正元年

特定建設業

合資会社 石亮組

杉江亮平(土木工学科6回卒業)

愛知県常滑市本町2丁目121番地

電話 (05693) 5-2255

金属プレス加工、植毛、塗装
木製品加工、塗装

石橋工業株式会社

代表取締役 石橋隆純

専務取締役 石橋邦勝

団地工場長 鈴木 健(土木工学科3回卒業)

郡山市日和田町字三本松6 TEL (0249)58-2231

本社工場、木工団地工場、東京工場、山荘よもぎ

越智建設株式会社

専務取締役 越智 豊
(土木工学科18回卒業)

愛媛県今治市南大門町1-1-15
TEL (0898) 23-3100

鹿島建設(株)

南福島出張所
所長 鈴木 謙
(土木工学科4回卒業)

郡山作業所
所長 村上治雄

水道(計画・調査・測量・設計)

共立水道測量設計

代表取締役 佐藤吉新
(土木工学科6回卒業)

福島県郡山市麓山一丁目1番14号
TEL (0249) 33-8235

福島県知事許可(特定)第2511号

衛生設備、空気調和設備設計施工

房総文化の国土を築く

力株式会社 加藤組

代表取締役 加藤育男
(土木工学科4回卒業)

本社 / 千葉県夷隅郡岬町長者123-7 〒(047087)2348
総合事務所 / 千葉県夷隅郡岬町中滝
山梨支店 / 山梨県北都留郡上野原町

土木、測量、設計

株式会社菊地測量設計事務所

代表取締役 菊地寿充
(土木工学科5回卒業)

福島県白河市字郭内120番地
電話 白河 (02482) 3-4270・2-1431

書店というより
情報センター



文化と情報を
提供して51年

紀伊國屋書店

本社 / 東京都新宿区新宿3-17-7
〒160-91 TEL(03)354-0131

快適な空気をお送りします
清潔な水をお送りします
技術とアフターサービスで社会に奉仕致します

公栄設備株式会社

代表取締役 上野公資
専務取締役 水沼啓次(土木工学科12回卒業)
工事部長 白井史昭(工業化学科13回卒業)
白河支店長 菊地耕三(電気工学科13回卒業)

本社 / 福島県郡山市菜根5丁目21-6 ☎郡山(0249)23-6000(代)
支店 / 福島県白河市金屋町38 ☎白河(02482) 2-6175

土木・建築・設計・施工

建設大臣許可(特-51)第2420

○ 佐藤工業株式会社

取締役社長 山本 卓

〒960 福島県福島市泉字清水内3 電話 福島(0245)57-1166(代)

テレックス 882276FUSATOJ

技術を誇る

知事登録、建設一般、公共工事95%

下里建設(株)

代表取締役 下里 隆徳

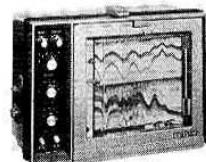
下里正美 (土木工学科19回卒業)

愛知県海部郡弥富町大字鎌島字川山713

TEL (05676) 5-1161

魚群探知機の専門メーカーとして20余年
その卓越した技術は今日も世界の海で活躍しています

鈴木魚探 株式会社



取締役社長 鈴木隆靖

(電気工学科13回卒業)

本社第一工場: 愛知県蒲郡市三谷町竹沢25 TEL(0533)68-0111代表
第二豊橋工場: 愛知県豊橋市西羽田町16 TEL(0532)32-5111代表
国内営業所: 銚路・札幌・函館・千倉・東京・焼津・浜田・長崎

総合建設業

○ 鈴五建設工業株式会社

代表取締役 鈴木 幸子

専務取締役 鈴木 廣 (土木工学科19回卒業)

本社 / 福島県石川郡浅川町字新町3 ☎ (024736) 2018(代)

工場 / 福島県石川郡浅川町字背戸谷地158の10 ☎ (024736) 2096



大成建設

取締役社長=菅澤英夫 〒104 東京都中央区銀座2-5-11 (03)567-1511 (大代表)



大成建設は
「科学」と「人の和」で
建設します

上水道・下水道・工業用水道

調査・計画・設計・工事監理・運転指導

T&C 株式会社 東京設計事務所

取締役会長 亀田 素

取締役社長(工博) 野中 八郎

本社 / 東京都千代田区霞が関3-7-4 (富士ビル) 100 (03) 580-2751(代)
関西支社 / 大阪府高槻市南茶川町4-29 569 (0726) 84-0304(代)
九州支社 / 福岡市博多区博多駅中央街7番2号 812 (092) 411-1566(代)
(博多SSビル) (国鉄博多駅前博多郵便局裏)
仙台出張所 / 仙台市花京院2-1-11 980 (0222) 61-1833(代)
(三和プレザーバ仙台ビル内)

月島機械の水処理装置

水は都市・地域の動脈をはしる生活の源です。月島機械は全国各地に多数の水処理設備の実績を有して、ユーザーよりご信頼を戴いておりますが、更にユニークな各種の機器を用意して皆様のご要望にお応えでき得るよう、努めております。

専務取締役 八木 勉(昭和8年機械工学科卒業)

取締役環境装置営業担当 宇高 義春(昭和21年機械工学科卒業)

環境保全装置
総合メーカー



月島機械株式会社

本社 / 〒104 東京都中央区佃2-17-15 ☎ (03) 533-4111

営業所 / 東京・大阪 出張所 / 名古屋・福岡・広島・札幌・仙台

地上測量、調査、土木設計、上下水道設計
登録番号 第(3)4621号

株式会社 東日測量設計社

〒963 郡山市西ノ内一丁目13番20号

☎ (0249) 22-2185(代)

代表取締役 池田 澄幸(土木工学科31年卒業)

常務取締役 滝田 賢治(土木工学科45年卒業)

社員 山内 敏昌(農業工学科49年卒業)

鈴木 俊男(土木工学科51年卒業)

鈴木 勝明(土木工学科53年卒業)

コンクリートポール、パイプ製造販売

東北ポール株式会社

本社 / 仙台市大町二丁目15の29

TEL (0222) 63-5252

工場 / 白河第一、白河第二、北上



●ラベル ●シール ●ステッカー ●総合印刷
●箔押し・ビニール貼り・打抜加工 ●包材

有限会社

東洋特殊印刷

本社 ●郡山市田村町上行合西河原18-1 工場 ●郡山市田村町徳定・郡山市田村町御代田

☎ 郡山 (0249) 44-3168(代)

ヒューム管・パイプ・ブロック

中川ヒューム管工業株式会社

① 中川ヒューム管

郡山営業所・郡山工場

郡山市篠川2丁目17-1 (安積永盛駅前) ☎ (0249) 45-0715

本社 / 茨城県土浦市真鍋1丁目1-13 ☎ (0298) 21-3611(代)

日東建設株式会社

福島営業所

福島営業所取締役所長 川上圭一朗(専門部土木科2回卒業)

郡山出張所 所長 梅原正章(土木工学科5回卒業)

福島営業所 / 福島市野田町字立石南8の123

☎ 34-3481・34-3487・34-3493

郡山出張所 / 郡山市日和田町大字高倉字神送坂7

☎ (0249) 58-3128

田村出張所 / 田村郡船引町大字船引字下扇田82

☎ (02478) 2-0872

- 調査
- 事業計画
- 実施設計
- 施工監理
- 技術監理
- 診断
- コンピューターによる解析

◆取扱業務◆
上水道、下水道、工業用水道、し尿処理
じん茶処理、工鉱業廃水処理、公害防止
河川管理、砂防、農業水利等の施設

日本水工設計株式会社

代表取締役社長・工学博士 岩井四郎

本社 / 〒141 東京都品川区西五反田6丁目24番4号 ピラモリ
名古屋出張所 / 〒453 名古屋市中村区井深町1番1号(新名古屋センター) ☎(052)451-7520代
大阪出張所 / 〒542 大阪市南区鶴谷中之町60番地(三和フレザービル) ☎(06) 245-0927代
広島出張所 / 〒730 広島市八丁堀13番8号(千日前ビル) ☎(0822) 28-1160代
九州出張所 / 〒812 福岡市博多区博多駅前3丁目16番10号(典産ビル) ☎(092) 451-6528代

野村建設株式会社

野村忠孝

(土木工学科7回卒業)

宮城県亘理郡山元町坂元字町6番地
電話 (02233) 8-1151(代)

マイホームからビルディングまで
建築のことならなんでもお気軽にご相談下さい

我社のモットー

工期の厳守 良心的な施工
完全なるアフターサービス

土木建築設計施工
福島県知事(特-51)第2826号

八光建設株式会社

代表取締役 宗像照男

専務 吉松敏(建築学科13回卒業)

常務 柳沼悟

郡山市並木一丁目1番地の11 ☎(0249) 22-8553

総合建設業

細川工業株式会社

代表取締役社長 細川専次

代表取締役専務 斎田正男

新潟市上大川前通3番町25番地

電話 (0252) 2-2161(代表)

建設コンサルタント

日栄地質測量設計株式会社

代表取締役 高橋信雄

(土木工学科5回卒業)

本社 / いわき市平北白土字東原前1-1

☎平(0246) 21-3111

営業所 / 郡山・会津若松

総合建設業

初野口建設株式会社

代表取締役 野口嘉一

野口和明(土木工学科50年卒業)

池田知英(土木工学科49年卒業)

群馬県富岡市富岡1667番地

TEL (02746) 3-1640代表

水処理の総合プランナー

浄化槽、三次処理槽、合併処理槽、雑排水処理槽
無臭トイレ、高置水槽、受水槽、蒸発散水槽、その他各種処理槽
設計、販売、施工、管理



本社 茨城県水戸市緑町3-3-26

TEL (0292) 25-5732(代)

学園都市 茨城県筑波郡谷田部町上横場2573-89

営業所 TEL (02975) 4-1865(代)

来たれ

誠意、熱意、努力の士よ

躍進を続ける我が

細川工業株式会社へ

(建築学科16回卒業) 細川正毅

(土木工学科26回卒業) 佐藤富雄

丸善・郡山営業所 開設のご案内

皆さまにはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。さて、このたび弊社では福島地区の皆さまに世界各国あらゆる分野にわたる最新の知識と情報をお届けするため、丸善・郡山営業所を開設いたしました。

皆さまのご要望に対し迅速的確にお応えするよう努力いたしますので、よろしくご愛顧のほどお願い申し上げます。

(M)丸善株式会社 (日大通り)

郡山営業所

〒969-05 郡山市安積町日出山字一本松100-11 ☎(0249)43-3060

営業品目:洋書/和書/外国雑誌/文具・事務用品/

教育機器・教材/図書館用品

営業時間:9:30AM~5:30PM (日曜定休)

総合建設業

福島県知事特定51-第6035号

美馬建設株式会社

代表取締役 美馬繁次郎

取締役工務課長 阿部秀世

(土木工学科8回卒業)

福島県南会津郡只見町只見610番地

冷・暖房・給・排水衛生設備設計・施工



株式会社 山元工業所

専務取締役 日下健一 (土木工学科18回卒業)

本店 / 郡山市並木1丁目18番15号 電話22-4541・22-8569・33-3088

南部事務所 / 郡山市小原田1丁目1番3号 電話44-3428番

片平連絡所 / 郡山市片平町 電話51-8613番

塩川出張所 / 塩川町上利根川 電話(02412)7-3347番

測量・設計・調査

陸奥測量設計 株式会社

専務取締役 伊藤寿彦

小泉秀夫 (土木工学科48年卒業)

影山正弘 (〃 51年卒業)

増子利勝 (〃 52年卒業)

郡山市若葉町17番18号

〒963 TEL (0249) 22-2229・32-4595

※ 営業品目 ※

- ボーリング、サンプリング、及び各種原位置試験
- 土質試験、各種現場室内試験
- 地下水調査、物理探査、動態調査
- 土質、軟弱地盤、基礎の計画設計施工管理
- 地盤改良工事、排水工事、注入工事

東名開発 株式会社

代表取締役 河野叶 (土木工学科6回卒業)

本社 〒462 / 名古屋市北区大曾根町145の1 ㈹(052)915-1081

土質試験室 / 名古屋市北区杉村町719

東京営業所 / 東京都千代田区神田佐久間河岸70 ㈹(03)866-4927

大阪営業所 / 大阪市西区江戸堀5の142 ㈹(06)444-4330

祝 日本大学工学部校友会創立20周年

貴い学園での四年間から

社会での生涯に

先輩の叡智と鞭撻を

日本大学工学部父兄会

会長 篠 一吉

外役員 一同

土木建築・設計・施工

東和工業株式会社

代表取締役 武田仁幸 (土木工学科3回卒業)

国分正孝 (建築学科18回卒業)

上野伸一 (建築学科20回卒業)

高橋健二 (土木工学科24回卒業)

新田彦文 (土木工学科25回卒業)

内山義夫 (建築学科25回卒業)

本社 / 福島県郡山市横塚3丁目16番18号

☎(0249)44-3073 代表

家庭的で
やすくのめる

スナック **GIN**
に集まろう

福島県郡山市駅前2丁目8番6号
TEL(0249)33-9399

住宅のことなら
(賃住宅・住宅・ローン)

ナグラ商事

福島県郡山市名倉47番1号
電話(0249)45-4567

広告一覧表

(五十音順)

会社等名	住所	頁
株旭商會仙台店	仙台市上杉1-9-38	30
株朝日ラバー	川口市江戸袋上留377	30
秋葉工業所	福島市宮下町8-21	30
株石井組	北海道斜里郡清里町羽衣町30	30
飯島設備工業株	水戸市見川5-113	30
(合資会社)石亮組	愛知県常滑市2-121	30
石橋工業(株)	郡山市日和田町字三本松6	30
越智建設(株)	愛媛県今治市南大門町1-1-15	31
株加藤組	千葉県夷隅郡岬町長者123-7	31
鹿島建設(株)	東京都港区元赤坂1-2-7	31
株菊地測量設計事務所	白河市郭内120	31
(有)共立水道測量設計	郡山市麓山1-1-14	31
紀伊国屋書店	東京都新宿区新宿3-17-7	31
公栄設備(株)	郡山市菜根5-21-6	31
佐藤工業(株)	福島市泉字清水内3	32
下里建設(株)	愛知県海部郡弥富町大字鎌島字川山713	32
スナック GIN	福島県郡山市駿前二丁目8番6号	36
鈴木魚探(株)	愛知県蒲郡市三谷町竹沢25	32
鈴丘建設工業株	石川郡浅川町字新町3	32
大成建設(株)	東京都中央区銀座2-5-11	32
月島機械(株)	東京都中央区佃2-17-15	33
株東京設計事務所	東京都千代田区霞ヶ関3-7-4 (富士ビル)	32
株東日測量設計社	郡山市西ノ内1-13-20	33
東北ホール(株)	仙台市大町2-15-29	33
東和工業(株)	郡山市横塚3-16-18	36
東名開発株式会社	名古屋市北区大曾根町145の1	36
ナグラ商事	福島県郡山市名倉47番1号	33
中川ヒューム管	郡山市笛川2-17-1	34
日栄地質測量設計(株)	いわき市平北白土字東原前1-1	34
日本水工設計(株)	東京都品川区西五反田6-24-4	33
日東建設(株)福島営業所	福島市野田町字立石南8-123	34
野口建設(株)	群馬県富岡市富岡1667	34
野村建設(株)	宮城県瓦理郡山元町坂元字町6	34
八光建設(株)	郡山市並木1-1-11	35
日本大学工学部父兄会	郡山市田村町徳定字中河原1	34
株フジグリーン茨城	水戸市緑町3-3-26	34
細川工業(株)	新潟市上大川前通3-25	35
丸善(株)郡山営業所	郡山市安積町日出山一本松100-11	33
東洋特殊印刷	郡山市田村町上行合西川原18-1	35
美馬建設(株)	南会津郡只見町只見610	35
陸奥測量設計(株)	郡山市若葉町17-18	35
株山元工業所	郡山市並木1-18-15	35

(記事) 広告の配列は一応五十音順といたしましたが
大きさの関係で前後いたしたものもあります
ので御了承下さい。

事務局だより

昭和53年12月20日

日本大学工学部校友会
会員各位殿

日本大学工学部校友会
会長 武田仁幸

昭和54年度総会通知

校友の皆々様には、各職域において益々御健斗のこととお慶び申し上げます。

さて本会会則第29条により、日本大学工学部校友会昭和54年度総会を下記により開催いたしますので先輩、後輩お誘いあわせの上多数御出席くださるよう御案内申し上げます。

記

1. 日時 昭和54年5月12日(土) 午後3時
2. 場所 日本大学郡山研修会館(郡山市愛宕町2-22) TEL (0249) 23-4193
3. 議題 昭和53年度会務及び決算報告、昭和54年度事業及び予算(案)審議、役員選出、その他(追伸)
 - (1) 諸般の事情により、本号に掲載の上記案内によって総会通知といたしますのでご了承ねがいます。
 - (2) 本年は4月に統一地方選挙が行われますので、5月開催にいたしますのでご了解ください。
 - (3) 出席なさる方は準備の都合もありますので、なるべく御連絡くださるようお願いいたします。
 - (4) 総会終了後、引き続き同所において恩師を迎える懇親会を予定しております。
 - (5) 研修会館宿泊希望の方は母校庶務課に申込んでください。

(別記参照)

研修会館に至る略図



◆日本大学郡山研修会館の案内

1. 使用を希望する場合は5日前までに工学部庶務課(TEL 0249-44-1300代)に申込むこと。現地受付はしておりません。
2. 宿泊料は1泊2食2,100円です。
3. 詳細は工学部庶務課に問い合わせてください。

◆事務局が表紙の記念館に移転しました

過日、当事務局は学部当局の御厚意によりまして、昭和52年10月完成したばかりの表紙の30周年記念館内事務室に移転いたしました。(本館については会報第31号にて紹介しております)
場所は正門から入って右手に見えます赤レンガ色の明るく近代的な瀟洒な建物です。母校を訪れたときは是非お寄りください。

◆異動報告についてお願ひ

下記のような異動があったときはご手数でもすみやかに事務局宛にハガキ又は電話等で御連絡くださるよう御協力をお願いいたします。

- 1. 住所が変わったとき
 - 2. 勤務先が変わったとき
 - 3. 改姓したとき (旧姓とも)
- 正確にくわしく

会員原票の内容を整備把握しておく必要があります。このような事由から当会では昭和54年度から3年計画で全会員の原票を電算機処理することを計画しておりますので、よろしく御協力くださいますようお願いいたします。

なお、この資料整備のため会員名簿の新規原票用紙を第1回卒業生の皆さんから順次送付いたしますので、ご手数でも正確にご記入になられてお送りくださいるようお願いいたします。

◆会員原票の電算機処理についての お願ひ

校友の皆さんには、別表卒業生人員表のとおり、すでに16,800余人となりました。従って会員台帳や名簿等の整備には相当の時間と労力を要しております。また最近大変問題となつてまいりました就職事情の促進等のためにはどうしても全国各地に散在しご活躍中の皆さんの御協力を得なければなりません。このため當々

校友会報創立20周年記念特集号

発行所	日本大学工学部校友会
郵便番号	979-66
	福島県郡山市田村町徳定字中河原1
電話番号	郡山(0249)44-1327
振替口座番号	(郡山)1990
発行日	昭和53年12月20日
発行者代表	会長 武田仁幸
編集者代表	事務局長 佐藤光正

編集後記

工学部校友会創立20周年の記念事業として、記念号の小冊子を計画したが、編集子に時間的余裕のないことから従来の校友会報を創立20周年特別記念号にするにとどめ、内容を少し豊富にして、小冊子にかいさせていただくこととして、昭和53年の定期総会の議に付して、承認された。

以来、写真や文献などの資料の収集、歴代会長の座談会、記事依頼などの労を重ねて來た。

特に日本大学総長鈴木勝先生はじめ、工学部長外木有光先生ならびに関係各位には御多忙中にもかかわらず、心よく原稿をお引きうけいただき誠にありがとうございました。

さて10年一昔の諺がありますが、二昔前には、カメラが今日のように普及していなかったから、なかなか写真などが手に入らず苦労しました。考えようではこの少ない写真だからこそ貴重なものもあります。資料欲しさに先輩を訪ねた折など、苦労話や珍談美談に当時の懐しい想い出がよみがえり、ここにもまた、歴史の重みが感じられました。

歴代会長を一堂に集めて、往時の姿を語っていたいたが、20年の歴史がさながら目前に展開しているような具合で、はるかに予定時間を過ぎてしましました。相当量の原稿となり、貴重な記録と

なりましたが、残念ながら紙面の都合で大部分削愛いたしました。

しかし、話の流れは忠実に表現できましたので本文をもってご了承いただきたいと思います。また勝手ながら記事がわざわざわくなることから省略箇所の明記は省きました。

今後、本会は創立30周年に向かって新たに歩を進めているのですが、校友各位におかれましては珠玉の青春を印す大事な写真などお持ちのことと存じます。次の編集のために、資料の収集を続けて参りますので、都合のよろしいときにお借りいたしたいと思います。

今回の編集は、決して満足できる内容ではありませんが、編集にたずさわった委員諸氏は、多忙の中で仕事を進め、特に歴代会長を聞く座談会は録音から稿を起こしたのであるが、なに分にも、この作業は不慣れであるため予想外に時間を費し発行日を大幅に遅延せざるを得なかつたことをお詫び申し上げます。

幸い、編集委員の方々の連夜に及ぶご尽力によりまして、ここに何とかまとめまして発行することができました。この紙面を借りまして学校関係者、御心配いただいた校友諸兄、印刷のことでは特段のご配慮を下された、東洋特殊印刷株式会社社長真壁秀好氏のみなさまに衷心より御礼申し上げる次第であります。 編集委員長 武田仁幸



日本大学工学部の学園を見護る
古田重二良先生の雄姿

先生の生い立ちから一生の偉業についてのべた顕彰の記、撰文日本大学副総長、高梨公之先生、原形製作今里龍生先生、揮毫工学部事務局長後藤弘氏。

